

幼 児 の 教 育

第 三 十 九 卷 五 月 號 第 五 號



東 京 女 子 高 等 師 範 學 校 內
日 本 幼 稚 園 協 會

倉橋惣三編 (新刊)

新體幼稚園唱歌

四六倍判
定價(送料共)
金七拾錢

目 日本的旗日の丸の旗
倉橋惣三 作曲
詞
次 道 ぶ し ん
倉橋惣三 作曲
井上武士 作曲

うびんやさん 倉橋惣三 作曲
弘田龍太郎 作曲
渡し場の船頭さん 倉橋惣三 作曲
中山晋平 作曲
火消しのなごさん 倉橋惣三 作曲
小林つや江 作曲

日本幼稚園協會編 (新刊)

幼稚園新唱歌

四六倍判
定價(送料共)
金五拾錢

目 だ か
小山村耕きよ 作曲
詞
次 雨 小杉山米輔 作曲
詞

ほ た る
青山綾子 作曲
詞
ふ し ん 場 小原張 作曲
詞
小松耕輔 作曲

○この二つの新刊幼稚園唱歌集は、幼稚園の爲に新しい歌曲を求めて居らるゝ方々に必ずや充分歓迎せらるゝことを期待してゐる。

八版 東京女子高師教授 倉橋惣三 先生著
 附屬幼稚園主事 倉橋惣三 先生著
 ▲四六判三百餘頁 ▲定價二圓八十錢
 ▲口繪挿繪多數 ▲送料十六錢

幼稚園保育法眞諦

特色

- 保育界耆宿の力作
- 現代の保育法原論
- 保育法眞諦寫眞帖

著者は幼児教育並に家庭教育の第一人者として本邦第一の東京女子高師附屬幼稚園主事と文部省社會教育官を兼ねたる人間味豊かな人格者として定評の上である。本書は現代に於ける最も完備し且系統ある保育法原論である。倉橋先生は稀に見る純眞の教育者にて著書少く系統ある力作は本書のみ。小石川の東京女子高師附屬幼稚園の施設經營は世界一なりと稱さる。而して其の建物もより以上優秀なる新保育方法の實際實景を寫眞となし多數之を掲載す。

五版 東京女子高師教授 倉橋惣三 先生著
日本幼稚園史
 菊判四六〇頁 價三・八〇 送〇・一八

五版 東京女子高師附小主事 堀七藏 先生著
幼稚園保育の諸問題
 四六判四三〇頁 價二・八〇 送〇・一六

五版 東京女子高師教授 倉橋惣三 先生著
兒童話の話し方と實例
 菊判三八〇頁 價二・八〇 送〇・一六

八版 奈良女子高師教授 附屬幼稚園主事 森川正雄 先生著
幼稚園の經營
 四六判三八八頁 價三・〇〇 送〇・一六

保姆檢定用養成所教科書

(版十二) 奈良女子高師教授附屬幼稚園主事 森川正雄 先生著
幼稚園の理論及實際
 菊判三一八頁 價三・五〇 送〇・一六

(版十) 奈良女子高師教授附屬幼稚園主事 森川正雄 先生著
保姆教育學
 菊判二八一頁 價三・〇〇 送〇・一六

(版八) 奈良女子高師教授附屬幼稚園主事 森川正雄 先生著
幼稚園教育學
 菊判一七五頁 價二・二〇 送〇・一一

(版五十) 東京女子高師教授 關寛之 先生著
兒童心理學
 菊判二百餘頁 價二・二〇 送〇・一六

東洋圖書株式會社發行

東京市神田區保一丁目一六番七三〇(振替) 東京市神田區安内寺一丁目二番八(振替)
 大阪市南區大寺一丁目二番八(振替) 大阪市南區大寺一丁目二番八(振替)

仙台市全國保育大會

倉 橋 惣 三

仙台市に於て開催の筈になつて居りました全國保育大會は前に本誌上にて御報告致しました様に延期になつて居りました處この度仙台市保育會長澁谷徳三郎氏より左記の來信がありました。誌上御報告申し上げますと同時に、大會の盛會ならんことを祈り、皆様の御協力を切望に堪えません。

拜啓陽春の候益々御清穆の段奉賀候

陳者豫て御高配に預り居り候全國幼稚園關係者大會は愈々本年十月を期し本市に於て開催のことに決定致候間何分の御配慮相煩はし度尙御手数數恐入候へ共右の次第關係方面へ御傳被下度願上候先は右御通知旁々御依頼申上度如此に御座候
敬具

本誌發行日の變更

本誌は從來毎月十五日に發行いたして居りましたが、來月號即ち六月號よりは一日發行に變更いたしました。誌上御報告を申し上げます。

昭和十四年五月

日本幼稚園協會

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編 (新刊)

觀察の實際

菊判一三〇頁
定價金壹圓
送料東京金六錢
市內金九錢
其他金九錢

○觀察の實際については何か参考したいといふ御希望は皆様から常に伺ふ所、本書はその爲に最も適切親切なる書である。

日本幼稚園協會編

幼稚園談話集 (三版)

菊版三五〇頁 定價金壹圓五拾錢
送料市內金六錢
地方北海道・臺灣・樺太・朝鮮・滿洲 金拾五錢

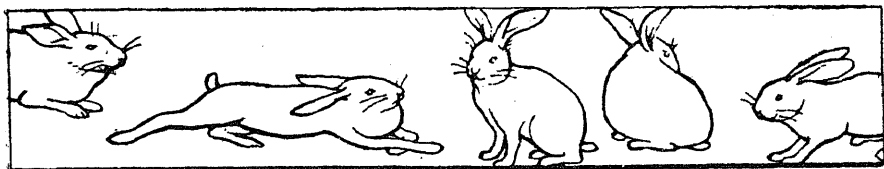
東京女子高等師範學校附屬幼稚園編

系統的保育案の實際 (四版)

定價金壹圓
送料金六錢

幼兒の教育 (月刊)

一ヶ月 金參拾五錢 送料金一錢
一ヶ年 金四圓貳拾錢 送料共



號五第 育教の兒幼 卷九十三第

——(次 目)——

口繪(そだてる)

卷頭(朝)

季節保育所の問題

幼兒の生活調査

健康保育座談會

蜜蜂の生活斷片

年長組になつた幼兒

鬼ミ鏡

殘花聚園(五)

蛙さんの遠足のお話

一男兒の保育日記をめぐるて(二)

倉橋惣三(一)

倉橋惣三(二)

牛島義友(七)

(三)

久米又三(四)

及川ふみ(七)

石井庄司(元)

石川謙(三)

武田雪夫(吳)

杉山米子(四)
久米京子(四)

ハイディ——ヨハンナ・スピリ原作

津田芳雄譯(四)

文部省推薦圖書

幼兒心理學

恩賜財團愛育會
兒童教養相談所主任

山下俊郎著

四六判美裝四三〇頁
定價二・五〇
送料一・四〇

我兒の幼時を大切にすることは彼の一生を光輝あらしめることである。

本書は現代兒童心理學研究の成果を育兒の實際に適用した稀な良書である。

本書は一歳より七歳に至る幼兒の心理學を親切に、平易に解説したるものである。特に幼稚園兒童については意を用ひ、玩具のえらび方、あそびせ方、遊戲の特徴、あまへ言葉の直し方等、保姆の日常必須の問題や事項が、最近の心理學的研究を基礎にして、きはめて實際的に説明せられてゐる。幼稚園の教育上保姆のなやむ問題はここに科學的な立場から完全に説明せられ、毎日の保育は自信と安心に充ちて、楽しく遂行する事が出來よう。



★序論 乳兒の心理 新生兒 感覺生活・智能の芽生え 乳兒の心理的特徴
★内 幼兒の心理 運動能力の發達・言葉の發達・空間・時間・數の概念・記憶と
注意・思考・創作・情緒生活・好奇心と興味・社會性・遊び・習慣の持つ意義・道徳
★容 的發達 幼時の精神検査 精神検査の概観・現行の幼兒智能検査法・検査の結果
の表はし方とその意味・精神検査に對する態度 結語 教學可能性の問題 附録文獻

(4)五三一四段九話電
番六五五六東京東管振

店書堂松巖

區田神市京東
二ノ二町保神

そだてる



附屬幼稚園

幼 児 の 教 育

昭 和 十 四 年 五 月

朝

朝の一ときこそ心の籠る時である。きのふから掃き清め、整へてある部屋に庭まではあるけれども、待つ心には、尙ほあちこちを見廻される。窓をあけて風をいれて、さて、自分も一寸腰をおろして見る椅子に、毎朝のこまながら、今日を今日として、子ども達のために迎へる心がする。

慌だしさこそ世に味なく、つめめ心こそ人にすぎない。集つてからは騒々しい幼稚園であるけれども、ひさりくを待つ朝の心にこそ、情もあり、味もあるものか。

元氣よく来た子を迎へて、先づさしのべる手に、にこやかに言ひかける言葉に、待つてゐた心の籠る朝こそ、その日の幼稚園のほんまの初めである。

そろく初夏の、一年中でもすがすがしい快よい朝を、子ども達のためにも、自分のためにも、粗末にしたり空しくしたりしては惜しい。
(倉橋生)

季節保育所の問題

倉 橋 惣 三

幼児愛護の施設の中で、その必要の最も明らかであり、又その普及の最も著しきもの季節保育所の如きものはない。その普及の著しいこと自身がその必要の大なるを示して居るに他ならないのであつて、昭和十一年度社會局調査によれば一萬四千五百五十八になつて居る。實に多數を云ふべきである。しかも昭和十三年に於ては三萬三千六百餘ヶ所であつてその年々増加率の大なるもまた著しい。この普及殊に増加率の多いを云ふことは、從來設置されてゐなかつた所に一度新に設置されるれば、必ずその次の年度に於て繼續せられるのであり、且又之が誘ひになつて村内の他の部落、更に近村にまで及ぶことの結果によるのである。今にして思へば、農繁期託児所の名に於てその必要を唱導せられた初期に於ては些か特別の施設の如き感があつてその必要の所以が理論的に云はれたりして居つたのであるが、今日に於てはもうすでに農繁期に於ける社會常識となり、理想をもつてその必要を説くことなどは無用なくらゐになつてゐるのである。また初期に於ては一般兒童保護事業と同じく特志性が多かつた爲に、その設置に於ても私設のものが多かつた。むしろそれが農繁期託児所の主體をなすものさへ考へられて居つたのである。それが今日に於ては、もよより私設の力に俟つことも多いのであり、云ふまでもなく結構なのであるが、社會的施設としての本質に於ては、公設が主體を考へらるゝに至つて居る。かりに地方廳が自ら直接に之を設けないにしても、之を促進し奨励してゆくことは地方廳當然の任務となり來つて居る。私設公設を比較して論ずるわけではないが、社會的特志事業が、社會的一般事業に變へたことを意味に於て之を擧げるのである。即ち季節託児所はその名の示す如く、季節々々に於て行はれる臨時施設ではあるけれども、その設置は常設的であ

る云つていゝ。即ち從來常設保育所季節保育所と云ふ名まで區別したのを、通年保育施設季節保育施設と名づけてもいゝぐらゐである。

併しながら、一つの私設保育所に於ける受託幼児数はこの施設の本質から云つて少數なるを常とするのであつて、従つて季節保育所に於て保育せらるゝ幼児の數に於ては必ずしも未だ多しと云へない。同じく昭和十一年度調査、六十一萬七千四百餘名となつてゐる。これは全國の幼児數から都市幼児數を除いたものゝ數に比べても決してゆきわたつて居る數と云へない。即ち季節保育所は地方的には相當なる分布状態を示してゐる云へるけれども、實際に保育してゐる幼児數としては未だ微々たるもの云はなければならぬ。殊に地方分布の状态を見るに、例へば愛知縣であるとか京都府であるとか兵庫縣であるとか、その數千を超えて居る地方に比べて、百にも達せざる地方が尠しと云ふ筈のものではないが、一縣内に百以下で足りるものは誰も考へることが出来ない。しかもさういふ少い地方が幼児期保護の必要の少い地方であるならばかりにともかくとして、むしろその反對であるが如き場合も見られるとすれば、分布の不均等は問題とせざるを得ない。これは地方の人々がこうした施設に關する理解に乏しい爲であるか、府縣當事者が、普及を圖るの熱意に於て足りない爲である。何れにせよこのまゝにあり得べきことゝは言へない。即ち季節保育所は他の幼児愛護施設に比べて普及の速やかなるに安心してだけ居てはならない。むしろこれから本格的に全部落に従つて日本農村幼児全體に向かつて充分なる普及を計らなければならない。言ひかへれば、こゝまで來たのがこの事業の理解第一期であつて、これからこそ本當に普及期に入るさしななければならない。この施設ほゞ普及を本質的急務とするものはないからである。

○
以上は單に普及に就て考へたのであるが、その内容に於ても亦殘されたる問題が多いのではあるまいか、我々が十數年前に於てこの施設の唱導をなした頃に於ては、兎にも角にも農繁期に於ける幼児の生活障礙を防止しやうと云ふのであつた。従つてその最少限度の設備をもつてこれに望んだのであつた。極言すれば、設備についても殆んど規定する所なく、

保育方法についても何等要求する所なく、農繁期中云はゞ幼児を預かり置けばいゝ云ふくらるのこゝで説き來つた。之は今日に於てもかくの如き臨急施設をして變りはないところでもある。設備方法の理想を主として、その爲に普及を妨ぐる如きこゝは本旨に反するこゝ甚だしいのである。實際的にも今日これより新に作られやうとする季節保育所に於て、設備方法の如何よりは、施置せらるゝこゝをそのこゝに於て先づよろこびこしななければならぬところが多いであらう。併しながら季節保育所そのものゝ經驗をその間に十分に充分意識的ならぬも行はれ來つた研究の結果は、簡單を旨とし簡易を本質とするこゝ云ふ中に於ても、それだけの進歩は行はれてゐなければならぬ筈である。簡單でもいゝ。簡易でもいゝ。併し農繁期託児所の方法を設備はいつまでも保育的に最低標準のみでいゝ云ふべきものではあるまい。

この點について、先づ第一に保姆の養成を云ふか、少くも臨時講習の如き方法による養成が必要であることは云ふまでもない。幼稚園、常設保育所の如き充分の資格を熟練を有する人々のみによつて行はうとすることは望んで得られないところである。素人でいゝのであり、女子青年團の娘さん達でいゝのであり、母としての經驗を持つ婦人會の特志婦人で大いにいゝのであるが、その人々が少くも季節保育所の理解を深め幼児生活の知識を持ち、保育方法上の心得を與へられたとするならば、その毎日の保育状態がよく整頓せる幼稚園に於けるが如きでないとしても、効果を擧ぐる點に於て極めて望ましきものが不知不識に行はれるであらうこゝを疑はない。今日各地方に於て地方廳が主體となつてこのこゝを行ふてゐるところも年々増加しつゝあるやうであるが、未だ決して充分を云へないと思ふ。殊にそうした試みの實際がまた極めて手輕なるやり方であつて、殆んどその集る人々に講習を受けたと云ふ感じ以上の實質を與へ難い場合が稀でない。殊にその講習内容が實際的であることは望ましいが、屢々あまりに實際的のみであつて、短時間の間に幾つかの唱歌、遊戲を教へらるゝと云ふやうなこゝで終るものが少くない。もごよりそうした保育實際資料の傳受も入要なこゝに相違ないのであるが、もう少し幼児保育の根本には入つて、第一には幼児期衛生に關する知識を、多少の實際技能或はまた幼児の心理的理解に基く正しき保育訓練の觀念、是等のものが與へられなければならないであらう。元來季節託児所は或は一週間或は長くて三四週間の短期なるものであつて、その間に於ける所謂保育效果に於ては實のこゝろそう多くを求め得られないもの

である。それよりも一面手不足なる家庭から子供を預る云ふこと、共にこの機会に於て日本の幼児の多数に對する身體的、精神的診斷を行ふのである云ふことは考へていゝことであるまいかと思ふ。健康乃至教育的相談事業はこれを設置することに於て隨意に來るものを迎へる云ふことでもある。或は強制的健康調査云ふ形に於て極めて多數のものを、次から次まで極めて短時間に於て調査してゆく云ふ方法もある。これ等に對して農繁期託兒所は保育としては數週間の短いものに過ぎないけれども、こゝした相談事業の機会としては最も適切にしてまた恐らく充分なる機會であると思ふ。したがつて理想的に云ふならば、この農繁期託兒所に幼児が集つてゐる機會を捕へて府縣の指導員が之を充分に調査検査するやうにあり度いと思ふのである。しかもそれは本日直ちに實現しにくいことであるのは明らかなことである。これに代るにその専門指導員の如く充分なる知識技能を備へてゐるものでないものであるけれども、農繁期託兒所に働いてくれる人々が、豫め打合はされた方法によつて幼児達の健康と性僻傾向とについて何等かの調査をなす云ふことが出來たならば、いわゆる單なる子供預りの域から初めて一歩進んだ所に至り得るであらう。

第二には設備と保育方法の問題であるが、これは人その人を充實するに比してそんなに必須ではないかも知れない。寺院の庫裡、學校の空教室、森の中のテント、濱邊の砂の上、何れも結構であらう。併し季節託兒所が前に述べた如く通年的ではないが、その村その村の常設施設となるならば、一回々々は臨時的な性質のものであらうが、その常設性に於て年々充實されていくべきであらう。おかしな例の様であるが、渡り鳥が軒に來て巢を作るは一種の季節施設である。通年的に營まれる巢ではないが、併し季節毎に時をたがへず歸り來るものを迎へてこれに相當の力をかけてやるのは農家の常である。去年の初夏、その秋、今年の田植又蒔入れ、これは一回々々として考へる他に、一つの決まつた仕事であり、吾々はこのきまつた云ふところに對しても少し設備上の努力が加へられていゝものではないかと思ふ。勿論、繰り返し云ふ如く、最低標準であつても無きにまさるものであることは常に言ふところであるが、かくの如き年を重ねて行はれる施設として自らなる充實は當然あつていゝ筈である。これに對してはざれ丈の設備がなければならぬ云ふことは決して云はぬ。それよりも年々の施設に對して一貫して心配し、一貫して考慮するところの中心人物があつてくれるならば、そ

こから自ら漸次的なる充實が生まれ来るであらう。

六

こゝにいふ事を云ふのも、季節託児所の普及發達の現状に於て謂はゞ一段の希望を云つて居るのである。こゝろで、特に本誌讀者諸君に向かつて云ひ度いことは、こゝした保育事業はそれが幼稚園令に従つて行はるゝ幼稚園に比して極めていはゞ偏則的なる如きものである。併しそれは形の上仕方の上のこゝであつて、幼児の保育の本旨に於てはもゞより何等變るゝところはないのである。また幼稚園を日々行つてゆく心持ゞ、農繁期を目の前にして急いで季節託児所を開設する心持ゞは自ら違ふところがあるであらう。一は専ら保育を念ゞし、一はさりあへずの急を救はうゞする。併しながらその急を救はうゞして設けられたる季節保育所の中に於ても幼児ゞして取り扱はれてゆく本當の意義は保育の本旨に他ならぬ。茲に於て日本全體の幼児の上に加へらるゝ幸福の爲に、季節保育所は幼稚園教育者の最も關心を持つべき筈のものであると思ふ。社會的要求ゞ云ふ立場からは社會國家の最大關心事であるが、幼児保育ゞ云ふ意味に於ては幼稚園關係者の最大關心事たらざるを得ない。少しく言ひ方が言葉を弄するが如きであるけれども、若し日本の全村全部落至る所に諸君の持てるが如き幼稚園が設置されて居つて、あらゆる幼児が諸君の幼児の如く日々に通年的に保育せられて居るゝしたならば、特に農繁期に當つてあはたゞしう急にかけつけねばならぬゞ云ふこゝもないわけである。私は社會理想ゞして季節保育所の必要をその必要なる理由に於て考へるゞ同時に、農繁期に於て特にかくの如き施設の必要なる所以は常設的保育施設の缺乏に他ならないゞ考へる。

幼兒の生活調査

牛 島 義 友

子供が毎日どんな生活をして居るかは世の親等は皆熟知して居る。併しそれは自分の子供に就てのみ云はれる事で他所の子供の事になる。ミ判然とせず、自分の子供でも他の子供と比較して順調に發育してをるものか、他と相違するにせよ、其程度は放置しておいてよいものか、或は早く改善し治療せねばならぬものか、ミ云ふ點になる。ミ確信を持ってなくなる。まして多勢の子供をあつかふ保姆、教師となるミ一人一人について母親程深く知る事は困難となり、一國の兒童問題を取扱ふ政府になるに益々自國の子供を知る事が困難になる。而も子供を知らなければ教育保育は出來ず。兒童問題を解決する事は出來ない。

そんな子供にも何か問題がある。或子供は家庭が複雑であるために素直に成長する事が出來ないかもしれない。他の子供は一人子であるために却つてスポイルされてゐるかもしれない。又或子供は成績が悪い爲に他の子供はよく出來る爲に劣等感を持つたり、又は慢心して性格が歪められてをるかもしれない。大人から見れば如何でもない事が子供

には大きな影響を與へる故に、殆ど凡ての子供に何等かの問題がある。故によい教師は「自分の組には問題の子供は一人も居ない」ミ誇る人ではなく、自分の組の中に多くの問題を發見する人である。同様によき政府は自國に多くの兒童問題を發見し、それに對して配慮してくる政府である。

故によき教師、よき國家は子供の生活を知る爲に特に努力する。此爲に性格検査や智能検査をする事があるが、是等より更に廣く子供の生活を知る事も必要である。斯る廣い子供の生活調査をするにはさうしたらよいかミ云ふ事の參考に合衆國の政府が行つた幼兒の生活調査を紹介しようと思ふ。

元來合衆國は科學的調査の發達した國柄ではあるが、兒童問題の爲に特に大仕掛の調査研究がなされてをる。即ち一九二九年に時にフーパー大統領は兒童の健康並びに保護に關する審議會を白聖館に召集し、醫者、教育家、心理學者、社會事業家を動員して極めて大規模の調査研究を行はしめ

兒童保護法の根據を作らんした。此白聖館會議は四つの大きな部會(醫療、公衆衛生、教育、異常兒)に分れ、各部會が更に多くの委員會に分れ、各委員會に又數個の小委員會が附設される状態である。茲で紹介しやうと思ふのは第三部會の中の小兒、學齡前兒に關する委員會が行つた子供の生活調査であつて、一九三六年に報告されたものである。

報告書は The Young Child in the Home の題下に四百頁餘り二百六十餘表からなる膨大なものであるが、主旨は米國の代表的家庭に於ける幼兒の生活の實狀を見んとして、白人は家族數二、七五八、幼兒數三、七七九名、黒人は二〇二家族、三一三名の幼兒に就いて調査せるもので、家庭の子供に對する保育態度、子供の生活狀況を主問題とする。

これから少し煩雜ではあるが調査項目を示し、興味ありそうな結果を少し書加へる事とする。先づ家庭自身の調査としては八項七十一目に分れる。

一般—— 調査者 日時 場所 入口狀況 面接者 電話番號
 父母の生死 父母の年齢 離婚 別居 同居家族 其他の同居人

教育—— 父母の教育程度

職業—— 父の職業 現狀、母の結婚前の職業 母の現在の職業

業狀況 母の一週間の就業時間數

人種—— 父母の人種 母國語 英語の巧拙

健康—— 父母の疾病狀況

環境—— 近隣の貧富程度 周圍の家屋 家屋の構造 竝に狀況

自家借家 住居年數 室數 照明狀態 窓 給水 便

所 調度 自動車 藏書數 玩具 庭 其廣さ並びに設備 公園までの距離

育兒知識—— 去年に讀んだ育兒書數 其所有狀態 育兒パン

フレット 新聞雜誌の育兒欄利用狀況 育兒専門雜誌購讀

數 育兒に關する放送聽取狀況 母の會等の出席狀況

保育施設 健康相談所利用狀況 兩親の教育方針の一致狀態

子供の生死狀況並びに調査に對する親の協力程度

此の育兒知識に關した結果を二三拾つて見やう。昨年中に親達か育兒に關した書物を讀んだか、或ひは何冊讀んだかを見るに一冊も讀まない者が四六・六%、一、二冊讀んだ者が二五・二%、三、四冊讀んだ者が一三・三%、五冊以上の者が一四・九%となつて居る。即ち半數の者はいはゞ無關心であるが他の者は相當に讀み、非常に熱心家も一割半位居る。此の關係は親の職業狀態によつて著しく異なり、例へば一冊も讀まない者は専門的知識職業に従事する者には二割しか居ないが、下層勞働者には七割も居る云ふ風である。

又ラヂオに於ける育児に關した講演をきの様に聴取して居るか、を見るに規則的に聞いて居る者が母親が10・1%に對し、父親は3%、時々聞く云ふ者は母親43・4%、父親21・8%、殆き聞いた事なし云ふ者が母親46・5%、父親75・2%となつて居る。アメリカではラヂオが非常に普及して居り、社會教育機關としてラヂオの使用が非常に大きいと聞いて居るが半数近い母親が聴いて居らず、一割の者丈が熱心な聴取者であるのは心許ない様にも思ふ。日本なきに於てはラヂオ利用者は一層少なくなるのではなからうか。父親の方が母親よりラヂオ利用者が少ないのは止むを得ない當然の事であらう。

又アメリカでは子供の保健、保護に關した施設が發達してゐる云はれるが、いかにも健康相談所の利用率は30%前後で日本等と較べ物にならない利用率を示してゐる。吾國に於ても保健所が全国各地に設けられつゝあるのがやがて米國以上に此の機關を利用する者がふえ、體位向上に資するの日も近いであらう。

次に幼児自身の生活についての調査に移らう。之は九項一二四目に分れて居るが、前の如く列記して見やう。

- 一般——姓名 性 年齢 生年月日 母乳が否か 授乳期間
身長、體重、その測定状況 定期身體測定をするか否か
睡眠——昨夜の就眠時刻 今朝の起床時刻 前日午前に於け

る晝寢状態 午後の晝寢状態 同寢室に寝る人数 同じベットに寝る数

何時間位寝るのが適當であるか云ふ事については學者によつて標準時間が示されて居るが併し此の時間は學者によつて區々であるので實際に何時間寝るか云ふ事の方がより實際的な標準となるであらう。此の調査に於て調べた昨日一日の夜と晝の睡眠時間の合計の平均を示すに次の様になる。

	満一歳	二歳	三歳	四歳	五歳
男兒	一四・四九	一三・四三	一三・五	一二・二四	一一・五九
女兒	一四・二三	一三・四一	一三・四	一二・三三	一一・一
就床時間	七・三五	八・〇四	八・〇六	八・一一	八・一六

右の如く一歳兒は十四時間半位寝、五歳兒は十二時間位寝れば普通と云へるが之より短かい者は睡眠不足と云はねばなるまい。又床に就く時刻は一歳兒は午後七時三十五分であり五歳兒でも八時十六分である。遅く迄起しておく事は色々點で弊害を招くが、以上の様な標準は日本の子供にも適應させて差支へなからう。

食事——昨日の朝食、晝食、夕食の獻立 昨日のミルクの分量 昨日の問食 その時間 食事が規則的であるか 食事の場合食卓が調へられてゐるか 偏食の状態 肝油を呑むか

間食について少しく説明して見るならば先づ常に間食をして居る者は三一%、時々なす者二三・九%、殆どしない者二八・九%、絶対にさせない者が一四・四%となつて居り、その時間は午後が大部分で七二・九%、午前は二三・四%となつて居る。間食は與へるのがよいか悪いかは人により意見を異にするかも知れぬが、要は間食に與へる物の性質によつて定まつて來やう。パンの様な固形物を與へるのなら感心しないが果物を與へてビタミンの補充をなすなら寧ろ好ましい事であらう。間食にパンを與へた者は四四%あるが社會階級によつて異なり専門的知識階級では二割位なのが下層階級では七割近く與へてゐる。之に反し果物を與へた者は前者は四割であるに對し、後者は二割半になつてゐる。即ち親の教養程度によつて斯くも相違するによつて正しき間食の與へ方を教へる必要がある。

清潔な習慣——下着を取換へる回数 上着を取換へる回数
 寝巻を使用するか否や 最近の入浴から何日経過するか
 夏は月に何回入浴するか 冬期は如何 排泄の調節の成立状態 昨日の排泄失策 一人で便所に行くか 自分の齒ブラシを持つか 自分で磨くか 着物を一人で着るか 一人で食事をするか 指を吸ふ状態 吃りの状態

幼児の入浴は體の清潔、健康の爲に必要な事であり、日本人は屢々沐浴して清潔を好むが外人は稀にしか入浴しな

いさ云はれてゐる。併しアメリカの小兒の實狀を調査してみると、九歳以下の子供は殆ど毎日沐浴して居て身體の清潔の爲に充分の注意を拂つて居る事が證明される。之に對して自ら清潔家だご自認して居る日本人は果して威張り得るであらうか。

次に排泄、食事、着衣等の基本的習慣の成立状態を見るに次の如くなる。(パーセントで示す)

	満一歳	二歳	三歳	四歳	五歳
大便					
男	五九・一	八八・五	九八・二	九八・九	九八・四
女	六七・三	九一・四	九八・九	九九・三	九九・五
小便					
男	三八・二	七九・一	九五・四	九八・九	九六・六
女	四七・八	八〇・八	九五・四	九五・二	九八・九
大小便共満二歳になれば習慣が成立して失策をやる事は殆どなくなつて居る。食物を一人で食べられる様になるのも排泄も殆ど同じ様に出來てをる。併し一人で完全に着物を着るのは困難で五歳兒でも半数或は四分の二位しか出來ない。					
満一歳	二歳	三歳	四歳	五歳	
食事					
男	三〇・二	八一・三	九三・九	九八・二	九五・一
女	三六・五	八〇・九	九三・二	九六・〇	九九・五
着衣					
男	〇・六	一・四	三・四	二一・二	四九・五
女	〇・六	三・八	一三・三	四二・三	七四・五

醫療疾病——健康診断 其時期、場所、目的(療治豫防) 豫

防注射(ツフテリア、チブス等) 種痘 最近半ヶ年間の病床

日數 百日咳 麻疹 水痘其他の罹病狀況 齒科治療 便

祕、腹痛、消化不良、風邪等の場合に如何なる家庭療法が

講じられてゐるか 左利 左利矯正

教育法——叱るか 誰が叱るか 先月は何回叩かれたか 教

育法

大部分の子供即ち九二・八%のものは叱られた經驗を持つて居り、其場合母親のみが叱るもの二七・六%、父親のみが叱るもの〇・八%、兩親が叱るもの六九・四%となり、吐責の責を父のみに譲るものは殆どない。子供を叩いて叱るのは感心した事ではないが普通行はれて居る遣方であるが、一ヶ月に平均三・二回叩かれてをる。之も親の教養狀態に關係し、下層社會の親程手を動かして叱る。之に對し「言つてきかせる」説得法は知識階級の親の執る方法である。

情緒生活——恐怖の對象 恐怖除去法 怒りの對象 家族に

對する好惡 嫉妬狀態 子供がうるさくせがむもの

知的生活——好きな本や話 昨日父或は母がお話をしてやつ

たか 文字、數、歌、お祈等を教へた事があるか 子供の

出生に就ての質問をしたことがあるか 其年齢 それに對

する母の答

社會生活——附添が居ない場合に行く事を禁じられる場所

家の内で友達と遊ぶか 家の外で友と遊ぶか 家族外の遊び友達 其年齢 昨日戸外で遊んだか、其時間、場所は如何 映畫を見るか 前月何回映畫に連れられたか 日曜學校出席の有無並びに出席狀況 出席し始めた年齢 託兒所幼稚園等へ通ふか

最後の映畫の問題に一言して此稿を終る事にしよう。米國は映畫の本場だけに觀覽施設は完備して居る事であらうが、米人は實によく見に行くらしい。學生や會社歸りのサラリーマンだけでなく家庭の婦人も子供を連れて出入りしてをる。先月に何回映畫を子供が見たかを質ねるに五歳以下の幼児でも次の様に三、四回も見たものが八%位居る。之は子供の身體並びに精神衛生上重大な問題であらう。

見ないもの%	滿一歳	二歳	三歳	四歳	五歳
一・二回	七六・五	六二・〇	六四・〇	五八・五	五八・七
三・四回	一四・七	三〇・二	二六・九	三四・三	二九・四
五回以上	八・八	七・〇	七・九	五・九	八・三
	〇	〇・八	一・三	一・三	三・六

健 康 保 育 座 談 會

○健康保育

菊池「お忙しい所をお繰り合せお出で下さいまして本當に有難う存じます。こんなに澤山の皆様がお出で下さいまして恐縮致して居ります。色々お話を伺ひし度いのでございますが、今日は、こちらではこんな案を立て、居りました。それは近頃體位向上云ふ事が云はれて居りますが、幼稚園に於きましても健康保育云ふ事は以前から重要視されて居りましたのですが、この事につきまして今日は一つ先生方に澤山の具體的な方法をお伺ひ致しましてお互に此の事に努力してまゐり度い存じます。ではお初め頂きます。指名して伺つた方が宜敷うございませうか」

倉橋「別に新しい問題云ふ譯でもありませんが、まあ之をめぐつていろいろ話して頂ませう」

坂内「皆様の所でなさつていらつしやる事を伺つて……」

倉橋「あなたの所から一つ……」

坂内「私の所は積極的な事は何もして居りません。極めて消極的な事しか……まあ皆様のを伺つて、偉い人は後からお話し致しませう」(笑聲)

(坂内先生がお隣りの福島先生の直接交渉で發言權ならぬ發言義務をお譲りになる。あちらこちらから「福島先生」「柔軟體操」の聲が起る)

倉橋「柔軟體操？中學時代にさう云ふ名前の體操がありましたね、柔軟云ふかコンニャクの様ですが……今のも其の柔軟ですか？」

福島「さあ、それはよく存じませんが……帝大で研究されて居るものです。ラヂオ體操のやうなものです……ラヂオ體操は力を入れてはいけないのださうです。一二二ミ力を入れるさ入れた所に無理が出来て疲れが出たのです。私が之を初めたのは私の近眼から來て居るのですが、一日中仕事をするに随分疲れて仕舞つて臉がさわつて見ても堅くなつて居ます。それで其の體操の頭の運動を始めたら……とても樂になりましたので幼稚園でも致して居ります。」

倉橋「それは其の方の創案なんでせうか？子供にこんな風

福島「私の所では朝、會集云ふのでもないのですが、や

はり一度集めませんとまごまりがつきません。それで朝、集めて、舊式なんですが、何かお話をして、宮城を遙拜して時事を話してから其の後で斯うして（實際に見せて下さり乍ら）首をグル／＼廻す運動を十回、右廻りが済んだら左廻りで……それから目の玉を動かすのです。目をつぶつてグル／＼……さうするに堅くなつた眼もやはらかくなります。子供はグル／＼廻すのが出来ないからバチ／＼まばたきをします。私の所に首のこんな曲つた子が居たのですが、すつかりなほつて仕舞ひました」

及川「それだけでですか？」

福島「それから手を上げたり下げたり……」

倉橋「して見せなければ……皆さんも一つ……」

（皆でいつしよにする）

福島「之は全部力を抜いてするんです」

及川「それ何回位？」

福島「やつぱり十回位です、ラヂオ体操はいふんですし、する時は子供は元氣よくする

出席者(五十音順)	
大和郷幼稚園	栗屋正子
本郷第一幼稚園	井田淑子
黒門小学校	浦野しづえ
附屬幼稚園	落合美彌子
千櫻幼稚園	鎌田まゐ
竹町尋常小学校	橋川ちゑ
附屬幼稚園	柴田みどり
東武豊洲学校	立野みえ
附屬幼稚園	田中ゆき
麹町幼稚園	徳久孝子
大和郷幼稚園	坂内ミツ
香山尋常小学校	福島春
附屬幼稚園	八木澤まげ
三井清泉学校	山村きよ
富士見幼稚園	山崎きよ
本會	倉橋惣三
側	及川ふみ
菊池フツノ	清水光子
船田ふさ	小島その
杉山米子	町田行子

んですけれど、さうもソハ／＼落着きがなくなくなります。それで私理屈っぽいんですけれど、おつむがよくなるからおつむの運動をさせうと云ふと子供は真面目になつてします、そして目をバチ／＼やつて、それから全然力を抜いて手を爪先まで下げたりに上げたりします」

倉橋「大人だつたらさうしたらいゝでせう？」

福島「疊の上に足を投げ出して坐り、手を爪先までのばします。それから斯うして（實際に首筋をもんでお見せになります）よくもみます。之をすれば少し位風邪を引いてもなほつて仕舞ひます。それから肩を上げたり下げたり、之も力を抜いてします」

倉橋「子供さん喜んでしますか？」

福島「はあ、さても喜んでします」

倉橋「號令はかけないんですね？」

福島「え、かけません……少し理屈ばつて居るんですけれど……」

倉橋「理屈ばつて居ると云ふのは、前の話でせう？ 体操其のものは……よく朝起きて

床の上で首を廻す體操の話は聞きますが目をバチクリするのは初めて聞きました。……然しそりや、體操云へば體操だが極めて樂な動きですね、害の起りやうもなささうですね」

福島「其の方のお話では、體操は力を入れないさよいので、力を全然抜きまして自然の運動をするのがよいので、形なき出來やうも出來まいさ……」

倉橋「此の幼稚園ではラヂオ體操をして居ます。私は體操さ名のつくものは一切したくない主義なんです、まあラヂオ體操を初めました。所が時々見るさ實に亂雜なんです。して居るのもあるがして居ない様な子もある。それで此間新學年の初めに、ちゃんとする様に訓辭したんですが……ぢやァキチンさしない方がいゝんですかね」

坂内「私の伺つたのは、力を入れた放しが不可いのださうです。ものをぶてば、ぶつた所で力が抜けます、所謂體操で力を入れた放すのは不可いのです、それでラヂオ體操や國民體操をやつたが爲に體格の悪くなるさ云ふ説がある位です。従來の體操は歐米人の體に合せてつくつたもので、其のまゝ日本人にさせるから無理が起るのです」

倉橋「武道はそれさ反對に純日本風なものですね」

坂内「棒でものを叩かせるのはよいですね、子供には自然

の運動がいゝのです。目的を持つて走るのがよい、例へば風車を持つて走るのなきが一番よろしいのです、つまり何にでも無理な事がいけないのです、人々によつて違はなければいけない、それを足をまげて坐る日本人が足をまげない西洋人の眞似をするから無理が起る、それで體格をこわす事になるのでせう、骨格のかたまらない子供にキチンさする事を要求する事は肋膜やなにかを損ふのです。同じ體操でも要領のいゝ子は、先生の目をかすめていゝ加減に運動しますから體はこわしませんが性質がづるくなり、眞面目な子供は一生懸命力の入れつつ放しをするから體をこわします。さちらにしてもよい事はありませぬ。日本人の體に合ふ體操が之から生れて來る可きですね、ある中學校で配屬將校の方がお代りになつた時に、生徒達の氣オ付ケの姿勢を見られて『其の姿勢の氣オ付ケで長く保てるか？』と聞かれ姿勢をなほされたさ云ふお話を伺ひました。それから幼稚園の時少し歩き方のおかしい子供が居ました、所が學校へ上つたら氣オ付ケが出来ませんでした。今調べて頂いて居るのですが家では年をこれば自然になほる事さ餘り氣にも留めず放つておいたのです。歩き方の變なのを直せばよいのでせうが、其の子供はお母さんの骨格が崩れて居たのでした。其の爲にさうなつたのです」

○具體體育

倉橋「それは面白い事ですね……それと関係があるかどう
か知りませんが、之は幼稚園ではないのですが、去年の
夏頃から體操の問題で體操の方の人と話して居ます。尤
も向ふが相手にならないから論議にはならないのですが
……(笑聲)……所で從來の體操は皆抽象的、分解的のも
のだから其の部分はよくなるが體全體の健康は増せない
でせう。矯正體操、鍛練體操としてはいゝでせうが、も
う少し氣持の入つた目的の入つた體操が欲しいと思ふ。
それで其の場合を考へるに三つの場合がある。一つは遊
戲云ふものがあります、『テフク』がおびる』云ふ事
なら、それを頭の中で考へ乍ら其の眞似をするなら、意
志でない感情が入つて來て、唯の手の運動ではありませ
ん。幼稚園の遊戲は之です。も一つは生活體操云ふ生産
體操云ふ呼んで居ますが、蹴を持つて土を掘る云ふ、鋤
で打つ云ふ、生産には必ず身體を動かします、唯それは
生産を主として居るから多少其運動は偏つたり、無理が
起つたりするが、それを生産の道具にならず、生産の方
は充分でなくとも、唯「何かする」云ふ事だけでも意義
が出て來ます普段の生活をも少し體操的に整理をするの
です、石を叩く、車を押す、なご坂内先生の云はれた通

り結果がありますね。一つは武道です、日本精神的意味で
學校の正課に入つて居ますが、歴史的價値の外に闘志が
あります。闘志を加へた運動には生活性があります。西
洋流體操では、先生云ふ號令をかける人は、例を示し
て見せて、それを生徒が眞似をする。劍道の場合は劍を
先生も斯う構へて(倉橋先生颯爽と劍道の型をお示しになる)
打込め云ひます。生徒が打込めば先生はハッ云後へ引
きます。號令云ふ方便的なものでなく關係云ふ氣合云
ふかの態度になつて來ます。此處に日本精神なご云ふ事
を別にしても意義が出て來ます、唯の體操より意味があ
ります、保育に於ては遊びの生活を存分に發揮すればそ
れで充分に丈夫になる。丈夫になる爲に特別の方法を講
じる必要はない云ふ論もあるが、論はさうだが、普通
の生活であらゆる方面の運動が行はれて居るでせうか?
體操によつて健康にする云ふよりも、足りない部分を
補ひ、過ぎたるをゆるめる云ふ意味に於て幼稚園には
何かあり度い。今の福島さんのなんかはそれです。子供
は自然に遊ばせれば申し分なし云ふ理論は理論、完全
に云ふ譯には行かないから、都會ではさう云ふ方面が
足りない云ふ事があるでせう、例へば川のある所では
それを跳ぶ、山のある所では自然に登攀する。都會の子
供にはさうもさう云ふ事が足りない。それで何か、此の

原理は原理として補充して行く必要はないだらうか？一度食物のビタミンに於てもさうであるやうに」

坂内「私も何か幼稚園に適當なのを考へ出さうとして居るのですが未だ御報告する様な事が出来て居りません。松原保育園ではお遊戯を全然させないのです。遊戯にも、スキップはいつ初めたらよいか、此の子はさう、此の子にはさう、又しやがむ運動はいつ頃からよいか、イモムシゴロ〜の遊戯は何時頃からしたらよいかさういふ問題があります、春だからサクラのお遊戯をすればいい云ふのは観念だけの事です。其の先生は根本修養動作を主として居ます。『ねん〜おころり』が一番いゝ事ださうです。お母さんが赤ちやんをねかせ居る境地、それが一番いゝ事です、母が相常無理な生活をして弱らないのは、其の爲である云ひます。此の『ねん〜おころり』も日によつて左にまわり易い日と右にまわり易い日があります。それが近頃のお母さん達は子供の守りをしないから弱くなるのです。産みつ放しで乳母にあつたり守りに頼んだりするのがいけないのです。だから腰が出来ません。體が悪くなると思つて赤ちやんを人に預けて育てさせるのは却つて身體の爲によくありません。おんぶしてねん〜おころりをするお産で骨盤のくだけたのが直るからいゝのです。腰がくだけてない人は、子

供のお小用をさせる時ちやんこ正しく出来ず。くだけて居る人は、自分がフラ〜なので、子供をまげて抱つて居るから子供が骨盤がまがつて仕舞ひます。これこそ、今のバンツがいけません。ちやんこ正しくしやがめないのです。其の先生は一度御不淨から出て来た子を正しく一度しやがみ直させるさうです。何をするにしても骨盤が大切なさうです」

倉橋「それはさうですとも、何の注意をされても、その譯が皆ありますよ、他でも何か？」

鎌田「先刻の生産體操云ふのは必ず何か持つてするのでせうか？今の體操ダンス、私の方の校長先生がよく仰言るのです、あんなのをして居ては不可ない、あれでは不可ないつてね、それで一度子供向きのを作つて見たんですけれぎ：：興味が子供にもありませんでした」

倉橋「スウェーデンのもデンマークのも分解體操だから、東洋流のも少し総合的になるでせうね」

鎌田「小學校の低學年受持の體操の先生に今考案して頂いて居るのですが、まあ『飛行機が来た』云ふ事を假定して其の眞似をさせるなま云ふ様に具體化して見ました、想像ですのです」

倉橋「今度知らせて下さい」

鎌田「今それに曲をつけて居るのです：：頭の運動とか、

何處の運動さか云ふのでなしに想像の方から……」

倉橋「つまり盛り上げたんですね」

鎌田「子供には未だして見ないんです」

倉橋「此處では框登りをして辛うじて木登りの代用に、山を登り降りし、又川も作りましたがさぶ事は出来ません。都會ではなかく、悉く云ふ譯には行きません。此處へ今犬を一匹連れて来れば随分運動するでせうが……（鎌田さんに）兎に角今度それを教へて下さい。柴田さん麴町では？」

柴田「養護が主になつて居ますから積極的にはさう云つて……」

○步行獎勵

倉橋「山村さんの所なきは？富士見（山村氏は富士見幼稚園主任）の運動さか西行の運動さかあるでせう？」（笑聲）

山村「私今出来るだけ歩く事をさせて居ます。少くも一週に三度は外へ出るやうにして居ます」

倉橋「一度にどの位歩きます？」

山村「一週に一度は必ず靖國神社にお詣りして、其の後市ヶ谷迄さか、其の先の公園迄さか、だん々距離を多くして、最初四十分位大抵一時間位、今日は一番多くて一時間十分位も歩きました。足の弱い子がくたびれたく

ご申します。何しろ家ではしご段を昇らせない子も居るんですからね、小學校ミ庭が別なのは有難いんですけれども狭いので外氣に多く觸れるには外へ出るより外ありません。唯靖國神社は敬虔な氣持で拜む事だけにして、彼處では遊ばせないやうにして居ます。充分足を丈夫にして終には強行軍をし度いと思つてます。今年はプールへ蓋をして其の上へござでも敷いて背骨を眞すぐにしてころがして見度いと思つて居ます。去年は石の上でしたのですが痛くて……之は私が寝る時の伸びくした氣持を味はせ度いと思つて考へ付いたのですが……」

福島「ござの下に鋸屑を敷くミ痛くなくていいさうです」

よ

鎌田「そんなにしなくとも大丈夫なんでせう？」

山村「痛いんですよ……ベッドは木がいゝさうですな」

鎌田「それは西式よ」

山村「出るのはいゝんですが唯手技がおくれます」

柴田「歩くのは私の方でもして居ます」

福島「歩く事は必要ですね。私の方は出てもすぐ墓地なん

で……」（笑聲）

山村「歩くのはお金がかゝらず一番いゝ健康法です」

徳久「私の方でも市ヶ谷公園、四谷公園、外濠公園等に行きます。それから今年から一週に一度づゝ農園に鳥を作

りに行きます。一緒に行くのは大變ですから一組づゝ交替に。お留守居の組は其の邊を歩きます(幼稚園附近)、向ふへ行くミ上衣をうすくしてはだしにします。此間は南京豆を蒔いたり移植したりしました。それが濟むミ畠のまわりを何邊も歩きます。それから川原に行つて遊んで歸つて來ます」

倉橋「何處ですか？」

徳久「玉川です」

倉橋「下谷は出掛けるのが難しいですね、上野へでも行きますか？私がよく一人で考へる事なんです、大塚驛ミ春日町あたりに毎朝一人づゝ先生が迎へに行つて待つて居て、皆を集めて連れて歩いて幼稚園迄來る。それが出來たらいいと思ひますが、之は相談する迄もなく、此處の道ではとても出來ません、危くて……」

山村「其點、私の方は市内に居る氣がしません」

鎌田「電車通りの横斷は割に樂ですね、二列で連れて來て一組が四列になります。三組ですから十二列になります。自動車ミ電車だけに氣をつけて自轉車は目に入れません(笑聲)、先生が真中に一人立つて、『驅けてはいけません急ぎ足で行きなさい』と云ひ乍ら通します。さうすれば車の方で待つてゝ呉れます」

倉橋「向ふを退けてこちらが進むんですね、名案だと思ひ

ますね(笑聲)

福島「然し保母がそんな特別な事をしないで、自然に子供の健康増進をするのがいゝんですよ、餘り頭を使ひ過ぎるミ肩が凝つて仕舞ひますよ(笑聲)」

倉橋「それが一番いゝんですね、私も心配許りするので肩が凝ります(笑聲)」

○要養護幼兒

倉橋「所で此處は入園検定をして入れるから、餘り弱い子はお氣の毒だが入れません。然し皆さんの所は検定をしないから、年々保母の心から見て要養護ミ云ふ弱いのが居るでせう？、さうしますか？」

坂内「居ります……歩くのが變な子は其の指壓の先生に見せます。するミ中には歩けないからと云つて親が無理に引張るので胸が固くなつて居たのがありました。食物の方から行くのは園醫の香川先生に、香川綾子さんにお見せして、又親御さんで特別熱心な方は香川先生御指導の榮養料理を作つて食療法をします」

福島「私の方は聲を大きく出す習慣をつけました」

倉橋「ホー(大聲で仰言つたので一同大笑ひ)」

福島「朝來たらお早うございませすミ大聲で云はせませす。大體近頃の普通の話聲はフゝカソです。子供はこちらが高

い聲でものを云へばいくらでも高く出します、それで神
經質のお母様を持つ子の聲は高い聲です。大聲で、おな
かから出る様な聲で『お早うございませう』云はせて居る
こ非常に快活になります、其の意味で唱歌も出来るだけ
大聲で歌はせて居ます」

山村「私唱歌の事では無鐵砲に大聲でござなられるご困りま
すから、嚴しく、餘り大きな聲を出すおのこの機械が
こわれるから靜にご云つて大聲をさめます。でもお早う
ござよならば小さな聲で云つた時は聞えないご云つて何
遍でも云はせます。又三人四人同じ事をくりかへして云
へる劇遊びを考へてやらせませう」

倉橋「ごの種類の虚弱でも聲を大きく出す事はいゝでせう
ね、外にありますか？親へはごうします？弱いごか何ご
か云ひますか？」

山村「私はこんな性質だからハッキリ申します。するごご
でも喜んで『本當にござうです』ご云つてくれます」

倉橋「こんな性質はどんな性質ですか山村さん？(笑聲)

八木澤さんの所なんかでは云ひませんか？」

八木澤「やはり申します」

倉橋「親はこつちで云ふ事を前以つて知つて居ますか？氣
がつかないで居る親が多いでせうね、注意するのは必要
ですね」

八木澤「よく自分で確かめてから申しますが、よく意地で
『家の子供に限つて……』等ご負借しみから理窟を云つて
抗議する方もありますが大抵は喜んで下さいます」

○幼稚園の効果

倉橋「二年なり一年なり幼稚園に居れば大抵丈夫になりま
せうね」

柴田「私の方の小學校では、組の編成が體質別なのです。

男一組、女一組ご男女組一組でこれが三組ご云つて一年
に入學の時レントゲンをかけて弱い體質の子を此の三組
ご云ふ男女組へ入れるのです。それですから此の組へ入
るのを母親は厭がりますが……幼稚園から行つた子がぎ
れ位その三組に入るか氣を付けて見ましたら、二年保育
の組は二十五人中八人入り、一年保育の組は十三人入り
ました。之はいろく原因もありませうが、一年保育の
方が二年保育より室内で過した時間が多かつたのです。
二年保育の方は日誌の端に其の何時間外で過したかを
書いておいて氣をつけて外に多く出す様にしたのです。
幼稚園から行く子はもつこく三組に行く数が少くなら
なければならぬと思つて居ます」

倉橋「然し幼稚園に來たからご云つて、必ず三組には入ら
ないご云ふ譯には行かないでせう」

坂内「私の方にも一年保育と二年保育とが居りますが、二年保育の二年目の初めの體格は、一年保育に入つて来る子供の方が大きく見えます。然し五月の検査の時見るに小さい様でもガッシリして居るのが判ります。一年前から居た方が矢張り何かありますね」

倉橋「それは勿論来て居た方がいゝですよ」

坂内「以前に五年の間統計を取つて見ましたらやはり二年保育の方がようございました」

鎌田「私もさうでした」(皆同感の様子)

坂内「小さい頃を見慣れて居るから何時迄も小さく見えるのでせうね」

山村「私の方では一年保育に來た子供は、何でもテキパキして操り人形の様で簡單によく操れますが、二年目の子供は何だかグズグズしたりしてなかく操れません。子供なりに神經を使つて居るんではないかなと思ひます」

鎌田「之はなかく疑問ですよ」

倉橋「よく考へなければならぬ問題ですよ、それは家庭に居るより精神的緊張は多いでせう、唯全體を見通した結論は簡單には云へませんが」

鎌田「市の方で私は體力検査を受け持つて、小學校から此間七十八の御回答を頂いて大變面白いと思ひました」

山村「三年保育は全くさうかと思ひます。私の所では二年

保育の子でも餘り小さいのは九月からいらつしやいさ云つて居ます。此のころの三ヶ月四ヶ月でぎんぐ大きくなりますから」

倉橋「家庭で健康を害する要素も多いでせう」

山村「家に居れば自由に一日中日向で遊べた者が、幼稚園に來た爲に思ふ様に日向へも出られなくなつたら……」

坂内「でも此の中に居る間は安心して居られる點があります」

倉橋「安心しすぎて居ますよ」

坂内「外では自轉車や自動車が來て……」

倉橋「子供はそう云つたものに轢かれては大變な命を脅かされるよりも、不規則な刺戟に興奮するのですね」

菊池「幼稚園がそんなに貢獻して居ないものなら心配ですね」(笑聲)

倉橋「貴方も悲觀しますか」(笑聲)

菊池「親達の中に、家の子供はしつかりして居りますから一年丈幼稚園に入れ度、小さいから、或は弱いから二年預つて頂き度いさ云ふ様なのが居ないでせうか？」

山村「さあ、それもありませうけれど、一年さ云ふのには經濟の方から云ふのが多いんではないでせうか……」

倉橋「然し皆さんは結論的に悲觀して居るんではないでせう」

山村「勿論で御座います。たゞさう云ふ事實もあるので
す」

倉橋「科學的研究と教育的指導とは違ひますよ」

山村「尤も、安心し切つて居たらよくはなりませんね」(笑
聲、同感の様子)

倉橋「此處では絶對的に二年ですが、又其處に主張もある
のです」

福島「若しも一年保育に來た弱い子供でも、二年來て居れ
ばさうにかなると思ひます。それに唯體が大きい小さい
と云ふよりも小學校へ行く爲には智能と身體は平行に進
まなければならぬから、それが爲には二年がいゝと思
ひます」

山村「それはよい悪いと云ふのではないのです。餘りに反
省される部分が多いので考へるのです」

及川「一年でいゝ子は二年來ればもつこよくなるんです
よ。だから色んな心配しなくても大丈夫ですよ」

鎌田「世の中が一年保育を望んで居ますね、一年保育の希
望者は四十人募集して九十人、二年保育の希望者は五十
人しか來ません」

柴田「私の方では早く幼稚園にあげ度いと云ふのが多いの
です」

鎌田「場所にもよりますね」

八木澤「私の方では此頃ガツリン統制で大抵歩いて來るの
で大變宜敷うございます」

倉橋「遊んで居る中に自然とかなり歩いて居るのですが、
やはり特別に歩くのがいゝんでせうね」

八木澤「私の方によい例があります。兄弟三人で兄二人は
一度も歩かなかつたのです。それが兄弟中一番弱かつた
末の弟は、ずつこ歩いて來ましたら非常に丈夫になつて
お休みもあまりしなくなりました」

倉橋「健康法のお話は之で打切りませうか」

○いろいろの實際

坂内「今一つ、幼児に、飛ぶ事、投げる事、坂を登る事が
大切なんです、此の投げる事が、やたらと投げられた
ら危いので、弓の的の様なものをつくりました。之に、
紅白のボールを投げつけさせました。三米位離れて、小
さい圓は直徑六〇糎にして、二重か三重の圓にします、
一番下が膝の高さになる様にすればよいさうです。之は
安田先生の御考案です。子供は餘り喜ばない様ですけれ
ども、やつぱりいつも三四人位は此處で遊んで居ます。
是等は本能ですから養ふ必要がありませんけれど庭が
狭いと出來ませんね」

及川「此頃繩ごびをよくしてますよ」

坂内「繩ミビはよろしいんですね」

福島「少し無理じゃないんですか？」

坂内「どうせ無理程には出来ませんよ」

及川「え、本當に下手ですね」

山村「小學校前一二ヶ月は本當によく遊べますね」

鎌田「でも教へてやればしますよ、私なんか負けて仕舞ひます」

柴田「私の方には、校長先生がなさるのですが、子供の身體をよく調べる道具があります。小さい時には鳩胸凹胸背柱彎曲等いろいろありますが早く判れば早く直せますからね」

倉橋「それはいゝことですね、調べてみて曰くのあるのがありますか？」

柴田「はあ、随分ございます。肺炎したの等左右胸の大きさの違ふ(不同胸)のが判ります」

倉橋「ちやんささう云ふ道具があるのですか。いゝですね」

柴田「あるのです」

坂内「そこがさう見出すのは幼稚園で、處置をして頂くのは専門家が宜敷うございませうね」

倉橋「幼稚園で丈夫にしなければならぬのはきまつた事ですが、もう少し熱心に方法を細かにする必要があるのでせうね」

柴田「保姆が生理的醫學衛生を知つて欲しいと思ひます。

すべり臺、ブランコにのるにしてもよい方法を知つて居れば、子供の間違つたのり方が直せます。關心を持つだけでもいゝのです」

倉橋「それはさうです。保姆養成機關が二年ださう云ふのは其處です。何しろ實地にしなければならぬのですから……運動醫學は進歩してもらひ度いものです」

鎌田「私の所は西日で日當りは悪く、雨の日には電氣をつけなければいられない部屋許りです。ですから机やござを出してなるべく外を使ひます」

倉橋「氣をつけて居ないさ一年を通じて案外外に出てない事が多いから、よく心掛けて統計をさる迄もないでせうが、計算して見るさよいでせう。一年の中で天氣の日が何日、其の中幼稚園に居るのは何時間……」

柴田「私それを日誌につけ初めてから餘りお天氣の少いのに驚いて居ます」

山村「それで私もお天氣のよい日に外を歩かせます。でも餘り豫定が残つて……」

坂内「其のお歩きになる時列をつくつて歩きますか？」

山村「それが問題なんです。團體生活の一番初めに訓練しませんと、幼稚園で自由に扱はれた事が濃厚に泌みこんで、小學校へ行つてから却つて他の子が緊張する時にも

キチンミ出来ないのではないかと思つて或程度までは訓練するのですが、遠足の時二人で手をつないで行けば安んずるし、他から見てもきれいな見えるのですが、一體子供は愉快なんでせうか？遠足の歸りにスキップしたり、横の列になつたりした時、實に楽しさうにして居るのです。其の度合が難しいんですね、動物園なごでも多勢一緒にワァァァ行つて、よつてたかつて見る方が楽しいんではないでせうか？」

柴田「私は今の組を小さい組の時から受持つたのですが、小さいから云ふのでゴチャ／＼歩いて余り叱らないで許して居たのですが、一年たつて新しく入つた子供と比べるに、さても其點統一がないのです。小さいから云つて自由にして急に大きくなつてからキチンミしやうにしても駄目ですね、ですからさうせさせなければならぬ事は小さくても訓練的にチャンミしなければ：

倉橋「揃つてする云ふ事も又楽しいんではないですか？」

山村「それはさうです。唯其の中で一日存分にさせてや程度い氣がするのです」

倉橋「(及川先生を指して)訓練感を伺はうぢやありませんか？」

坂内「訓練の最初の一週間さか十日さかをさうなさるんですか？」

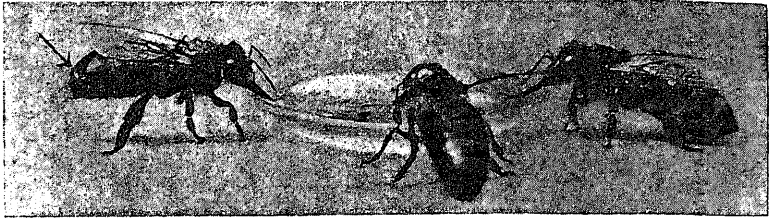
及川「昨年の組は林の組でした。玄關迄が遠いのですが、お歸りの時其の玄關迄を一行に並べて行くおけい古をしました。なか／＼うまく並んで歩けないのです。毎日さつちが負けるか根氣くらべをし乍ら……たう／＼一ヶ月位してやつミ出来るやうになりました。本校へ行く時もさうでした。本校へつけばバーッミ放してやるのですからそれ迄は負けません。さうせ他の所で充分自由を味つて居るのでから自信を持つてして居ます」

山村「小人數では味へない、多勢でゴチャ／＼さ行く楽しみもあるのですが、やはり負けない方がいゝでせうか？」

及川「他の事で充分自由ですから……」

山村「勿論初めは大切ですね」

菊池「いろ／＼お話を有難うございました。では……」



蜜蜂の生活断片

——蜜蜂の花時計——

東京女子高等師範學校教授

久米 又三

一
この前に、花の蜜や花粉をはじめて発見した蜜蜂が、そのやうな方法でその発見を仲間の蜂共につたへてゆくかに就て書いてみた。はじめて発見した蜜蜂が奇怪な舞踏をするミ、これが所謂「言葉」ミなつて仲間の間に了解され、仲間の蜂共がこゝで始めて活動をはじめて、発見者によつて教へられた新しい資源を開発しだすのである。其の後この仕事は、資源がつかざるまで幾日も幾日も続けられてゆく。ミころが、蜜蜂共は一日中のべつなく働きつゞけてゆくかミ云ふに、さうも決してさうではないらしい。例へば、最初の蜜蜂が朝の十時頃にはじめて蜜ミか花粉ミかを発見して、仲間の蜂共がそれに従つて活動を開始したミするミ、翌日から必ず朝の十時近くに活動が起るが、しかし決してそれ以外の時間には花を訪れて、蜜も花粉も集めようミはしない。来る日も来る日も、天候の條件さへ悪くなければ、この様な規則正しい活動がつゞけられてゆくだけである。さうも蜜蜂の活動には、一定の時間的な週期があるらしい。

二

しかし、蜜蜂の活動が、この様に時間的に規則正しく行はれてゆくミいつても、それは決して蜜蜂の活動が、もミノ、日中のある定つた時間だけに限られてゐるミ云ふ様な原因から起つて来るものではない。自然では蜜や花粉が提供される代りに、今砂糖水をいれた器で實驗をや

つてみる。この器を終日外にだして、そして蜜蜂の吸ふに
まかせて置く。蜜蜂共は終日これを訪れて、一日中活動
をつづけてゆく。又同じ蜂が何回も何回もやつてきて、
砂糖水を吸つては巢へかへつてゆくのである。砂糖水を訪
れた蜂の数をしらべてみても、一日の中のある定つた時間
に限つて、特別に數多くの者が訪れてくる言ふやうなこ
こは見當らない。そして勿論、次の日でも同じ様な状態が
つゞいてゆくのである。だから、蜜蜂の活動がもとも定
つた時間に限られてゐる云ふのではない。蜜蜂は日中で
あれば、いつでも活動はできるのである。

ところが、こんきは日中のある定つた時間に限つて砂糖
水をだしてやつて、それ以外の時間にはこれをかくして出
さないことにして置く。さうするに其の翌日からは、その
定つた時間になるに昨日訪れて来た者がやつてきて、せつ
せき砂糖水を吸つてゆくが、決してそれ以外の時間にはそ
の場所を訪れ様はしなくなる。もう少し實驗を複雑にし
て、一日に二回砂糖水をだしてをく、翌日からは規則正
しく二回の時間に限つて砂糖水を吸ひに来るが、又決して
それ以外の時間にはやつて來ない。大體二時間の間隔さへ
まつてやれば、規則正しい訪問は、一日に何回砂糖水をだ
して置ても、混亂に陥る様なことはない。

この實驗をみるに、不思議なことに、蜜蜂には時間が判

つてゐるらしい云ふことが推測ができる。しかもその時
間はいつも二十四時間を單位とした時間である。此の單位
は四十八時間に延長することも出来ないし、二十四時間よ
りは短くすることもできない。砂糖水を一日置きにだして
みても、蜜蜂は必ず二十四時間置きに訪れてくるし、十八
時間置きにしても、この短くなつた時間に適應して、自ら
の活動を合せてゆくこともできない。

三

一體何が原因で、蜜蜂はこのやうな二十四時間を單位と
する週期的な活動に固執するのであらう。人間の經驗から
云ふに、一日に云ふものは光の強さの變化や、詳しく云へ
ば温度や湿度や其の他種々な變化で了解することが出来る
が、蜜蜂にはこの様な外部の變化に云ふものは別に意味の
ある程大きな影響を與へはしないのである。暗室の中で、
一定の強さの電氣をつけて、前と同じ様な實驗をやつてみ
ても、温度や湿度等を一定にしてやつてみても、蜜蜂の活
動にはいささかの變化もない。いつも定つた様に、二十四
時間毎に砂糖水を吸ひに訪れてくるだけである。だから、
蜜蜂に時間の感覺があるにすれば、それはもつと内部的な、
生理的な感覺があつて、吾々が感ずる様な感覺器を通じて
のものではないと言へる。

そして又、此の内部的な生理的な感覺が、過去の活動の

經驗から固定されていつたものではないことは、親から分離して飼育した子供でも、活動を始めると共に、この様な時間感覚にしばられてゐることをからでも判る。

四

一體蜜蜂が、この様な不自由な、固定された感覚をもつてゐて、自然での生活にどんな意味があるか云ふのであらうか。こゝにも、少しばかり自然の攝理の不思議さが、顔を出してゐる様である。

蜜蜂が好んで訪れる花は、蜜や花粉を蜜蜂に提供してくれるわけであるが、蜜や花粉は一日中間断なく提供されてゐるか云ふは、決してさうではないらしい。色々な花には、蜜の分泌の多量な時間や、其の濃度の高まる時間や、又花粉が特に豊富につくられる時間が、一日中のどの時間であるかと定つてゐるのである。そして多くの花では、朝の時間に此の高潮期がおそつて來るのである。蜜蜂の活動が、この高潮期にのつてゆけば、花の方でもつてゐる「花時計」と、蜜蜂がもつて生れついた「生理時計」がぴつたりと一致して、花にも良し、蜜蜂にも良しの生活がつゞくことになる。

花園に、ソバの花を植えて、假にこれを時計の形にでもかたごつて、そして、蜜蜂の訪れるまゝに開放してをくとする。ソバの「花時計」が時を報ずるを、蜜蜂の「生理時計」

がこれに合せてソバの花を訪れる。電氣時計につながつたベルが、けたたましく鳴り響く代りに、ソバの花と蜜蜂とが、おだやかな自然の時を報じてくれるとしたら、ユートピアはこんな所から湧いて出ないとも限らない。

○
新庄よしこ氏は、本會幹事として十數年の永きに互り本會の爲に盡力せられました。この程御都合により女高師保姆の職を御退官になりました。本會の爲永い間盡された御功績を深く感謝申し上げます。後任としては本年三月、東京女子高等師範學校文科卒業の船田ふさ氏が就任せられました。本會の爲にもおつくし下されます。(日本幼稚園協會)

年長組になつた幼児

及 川 ふ み

新入園児でこゝしばらく賑かな混雑の中に過した幼稚園も五月の聲をきくも餘程おちついて来る。小さい組の幼児たちはまだ幼稚園生活になれないで、附添をはなさないかたたり、おちついてお友達遊びが出来なかつたりしてゐるのは勿論であるし、年長組の幼児たちもこの新入の幼児たちの様子に氣がまられたり、或はそのお相手のお役をつまめるなごで多少の影響を受けてあはたゞしく過してしまふ。

一ヶ月近くのうちに年少組の人たちもそれ〴〵お友達もよく遊べる様になり、附添人のかげも園の内外から消えて、幼稚園はまたもこの様に幼児と保母とだけでしんみり遊べる様になつた。

一ヶ年の幼稚園生活を過した年長組の幼児達は、日頃羨しかつた年長組に進級した喜びで一ぱいである。自由遊びにも、いろ〴〵の製作にも、唱歌にも遊戯にも實にはりきつて愉快そうである。自然の季節によつて、草木の萌え出る若葉若芽の力強さにもおさらない様である。新年の始めに大人が何きはなしに、今年こそはご希望に満ちて心持を新

にするのと同様に、學年の始めは幼児たちの可愛らしい氣持にも一つの區切りのつく時である。

年少組の終り近くに、一人〴〵幼児のこゝこについてこの一ヶ年を省みた。先づ身體の健康について、比較的缺席の多かつた誰々、又知能方面に如何かと思はれるものはなかつたか、或は性格でも云はうか幼稚園の生活の状態が圓滑にゆかない幼児は如何等々考へられた。

健康が充分でなかつたものについては自分でも注意するのは勿論であつたが家庭の方へも幼稚園以上留意される様願ふ事でもあつた。たゞ幸なこゝこには自分たちのあづかる幼児達は身體検査を経て入園を許されてゐるだけに特別な虚弱幼児はないのである。

次に知能方面であるが年少組の間はつぎめてこの方面の調査をさけて見た。たゞその幼児全體としての觀察にさめておいた。

次に性格のこゝこであるがこれは知能検査の様に時々一人づゝの幼児についてこゝこさらに検査をしなくても、いつも

幼児と一緒に遊んで居れば自然觀察が出来るものである。これについては健康の點、知能の點は異りひたすらに幼稚園生活のうちに善導すべきであるとして自分の至らないのをいつも責めたのであつた。

幼稚園での生活状態がなか／＼圓滿に出来ないものについては心づき次第何かを導くべきは云ふまでもない。皆がきちんとしてゐる間にも一人だけはそれが出来ない。お友達の間同志に何か小さい出来事がおきたにしても、こゝ／＼しく取りたて、お友達にも告げずれば、先生にもいそぎたて、告げ口もする。こんな風でいつも全體の生活の上／＼の波紋を生んでゆく。一幼児にしても、つまらない事であると同時に、他の友達にもぎん面に面白くない影響になるのは云ふまでもない。たゞこんな例は一二であるが言葉で云ひあらはされない様ないろ／＼の場合が澤山にある。身體の健康のことは家庭の人にも協力のせい／＼の方法もあり又知能の發育のや／＼おかれてゐる様な場合も、ある程度まで順々努力すれば比較的この缺點を補ふ事はむづかしい事でもない。たゞその幼児全體としての性格の變つたものゝ指導は六つかしい問題であつて、しかも家庭の協力をまつさいふよりも、むしろ我々のみがより多くしなければならぬものである。

年少組の終り頃には小さい幼児たちに、年長組になる希

望みにも自重をいつも話した事であつた。四月も未だくになり年長組になつて数日後特にこの自重が一幼児に著しく見えてきた。いつも何かの折に際だつて見えた幼児、いつも存在のはつきりしてゐたものが目立たなくなつた。周囲のものにこゝくに一人だけ氣づかない様になつた。小さい幼児の自尊心にもしみ／＼嬉しくなつて一緒に切り紙するその幼児に靜かに「誰々さんあなたは大きい組になつてほんまによい子になりました」を心からほめた。にこ／＼した顔で大きくなつた。

新刊 社會教育學

朝原 梅 一著

發行所

高陽書院 東京神田小川町三ノ八

定價 一圓八十錢

著者朝原梅一氏は人も知る如く、東京府社會事業主事として、長い間社會事業の實際に携はられて居られる方であるだけに、本書は、教育哲學の分野から説かれたる從來の所謂社會教育學とは全く趣を異にし、どこまでも社會事業に立脚したる社會教育學である。書中第二編成人教育機關、第三編幼児及少年の社會教育施設、第四編幼児及少年の收容教育施設の項などは、幼稚園託兒所關係者の必讀すべきものであると思ふ。大方の御購讀を切に御奨めする次第である。

(編輯部)

鬼と鏡

東京女子高等師範學校教諭兼教授 石井庄司

例の常陸國風土記の久慈郡の條に次のやうな短い記事が見える。原文では僅かに十六字しかないものであるが、眺めて居るに色々事を考へさせてくれる。

まづ本文を掲げてみやう。

東山石鏡。昔有魍魎。萃集翫見鏡。則自去。水府御藏版さいふ江戸時代の版本には、傍訓が施してあつて「東の山にかがみ石あり」と讀むやうである。最近の刊本では各々異つてゐて、大日本文庫の風土記集(植木直一郎博士校訂)並に大倉精神文化研究所の神典には「東の山に石鏡あり」とある。また武田祐吉博士校訂の上代文學集並に岩波文庫の風土記等には「東の山に石の鏡あり」とある。

水府本の頭註には、「鏡石」と文字の順も改めてあつて、その所在を生井澤村とし、石は月鏡石といふものであるとし、其の色は紫黒で潤澤あり、鏡とすることが出来るといふやうな事を述べてゐる。しかし原文には明かに「石鏡」とあるのだから「鏡石」と書き改めることは如何かと思は

れる。且「石の鏡」といふのが最も穩當と思はれる。

要するに此の一節の意味は、東の山に石の鏡がある。昔鬼があつて多勢集つてその鏡を翫び見て、そこで自然に何處かへ行つてしまつたといふのである。原文には此の次に割註をして、「俗に曰く疾鬼も鏡にむかへばつひゆ」とある。此の「俗」の意は所謂雅俗の俗ではなく、國風であり、こゝでは諺といふ意味であらう。鬼も鏡にむかふと自滅するといふので、鏡に對して神祕的な力の作用のあることをほのめかしてゐる句である。

魍魎は普通に魍魎罔兩といつて、山林の異氣から生ずる怪物即ち「すだま」或は「木の精」といはれてゐるものである。然し註には「疾鬼」とあるせいか諸本はいづれも「魍魎」を「おに」と訓んでゐる。一體「鬼」とは何であらうか。

出雲國風土記には、目一つの鬼が出てきて、田を耕してゐた男を食つてしまつたといふやうなことが出てゐる。一つ目小僧の類であらうか。日本書紀の欽明天皇紀には、左渡國の北の御名部の崎に肅慎人が漂著して、春夏に魚を捕

へて食物を記したことを記してゐる。そして佐渡國の人が言ふには、あれは人ではない、鬼魅おにであるといつて、敢へて近づく者がなかつたことがある。異邦人を以て鬼おにとすることはその後にも見えてゐるところである。なほ齊明天皇紀には、官中に鬼火が顯れたことを記してゐる。それは朝倉橋

廣庭宮は、朝倉社の木を伐つて造營せられた爲としてゐる。しかし鬼火おにびは如何なるものか積極的に見るべくもない。上代文獻に見えてゐる鬼の記事は以上で盡きるのであるが、鬼の事は平安時代には「もののけ」といふ形で物語の中でも重要な役割を果すことになる。桃太郎の鬼が島、大江山の鬼、黒塚の女なご子供等にも親しまれてゐる。鬼はぎんな風貌を備へてゐるものであらうか。支那のものである史記の五弟紀に「魍魎」の註として人面にんめんで獸身四足、好んで人を惑はすおぼ書いてゐる。それに對して佛教でいふところの夜叉または羅刹は、人の形をして牛の如き角あり虎の如き牙を持ち裸で腰には虎の皮を絡ひ、相貌は瘡惡で怪力のある者おにをいふことになつてゐる。古今著聞集に「鬼は物いふことなし。その形、身は八九尺ばかりにて髪は夜叉の如し。身の色赤黒く、眼、圓くして猿の目の如し、皆裸なり、身に毛生ぜず」と書かれてゐる。

鏡に就いては、畏くも神鏡を始として多くの古傳がある。白銅鏡といふやうな語もあつて、主として金屬製のもの

のであるが、此處にあるやうな石鏡もあつたやうである。此の鏡かみと鬼おにの組合はせに興を引かれて、自分は以下のやうな小話を組立てて見た。幼兒には餘り恐怖心を起させぬやうに、鬼の取扱に就いては注意を要することと思ふ。

二

むかしむかしあるところにおぢいさんがありました。おぢいさんは、いつもお馬を引いて山から里へ、里から山へ荷物をはこんでゐました。

ハ―イ、ハ―イおぢいさんが唄をうたひますと、お馬はヒンヒンと元氣よく重い荷物を運びました。お馬のからだに附けた鈴はチャラン、チャランと氣持よく鳴りました。ある日のこと、おぢいさんがお馬をつれて山の方へ歸つてきました。荷物がいつもより重かつたので、けはしい山を登るのは大變苦しく、だんだんおそくなつてきました。カア、カアお山では鳥がねぐらに歸つて行きます。お日様はだんだん西の山の方に入つて行きます。

「おや、もう日が暮れるぞ」とおぢいさんは、びつくりしました。

「お馬、さあ早く歩いておくれよ、お日様があんなころへ入つて行きましたよ」

こいつて、ごんごん歩いて行きました。

するするしるの方で、オーイ、オーイお呼ぶ聲がします。

誰だらうと思つて、立ち止まつて見ましたが、そこには誰もありません。そこでまたお馬ご一所に歩き出しますよ。

「オーイ、おちいさん、オーイ、おちいさん」

と呼びました。ふりかへつてみるに、何時の間に、きこから出てきたのか、大きな青鬼がおちいさん目がけて追つかけてきます。これは大變な事になつた。早く逃げろ、逃げろとお馬ご一所に走らうとしますが、荷物が重いので歩くことが出来ません。もう今にも追つかれさうです。

さうしたものが考へてゐましたが、「さうだ」とおちいさんは手を打つてよろこびました。お馬に積んでゐる荷物の中から、大きな鏡を取り出しました。青鬼はぎんぎんおちいさん目がけて追つかけてきます。

そこでおちいさんは大きな鏡を兩手に持つて、青鬼の來る方に向けて待つて居ました。鏡は夕日をうけてピカピカと光つてゐます。青鬼は變なものが出てきたとは思ひましたが、一呑みに呑んでやらうと進んでまゐりました。見るに、向ふには恐ろしい青鬼が立つてゐるではありませんか。

「誰だ！ そこにゐるのは誰だ！」

と青鬼が大きな聲で言ひました。そこでおちいさんは、鏡を動かし、「ウー」と言ひました。鏡の中に映つてゐる青鬼がうなつたやうに見えたのでせう。

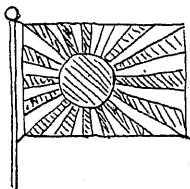
驚いたのは、本當の青鬼です。

「さあ、こゝへ出て來い」と言ひながら、自分も恐ろしいものですから、あべこべにチリチリと一歩づつ後ずさりをしました。するに鏡の中の青鬼もだんだん後へ戻つて行きます。その中にさうさう青鬼はずつと向ふの方へ逃げて行つてしまひました。

おちいさんはお馬ご一所によるこんで山の家へ歸つて行きました。

海軍記念日も近づきました。幼稚園では、海軍記念日だからと言ふでなくても軍艦旗をよく掬へます。子供たちの帽子につけてやることもあれば、胸につけてやることもあり又子供のこしらへた粘土の軍艦、木の軍艦等につけてやることも屢々あります。がさて、その正確な寸法と言ふことになる一寸當惑することがありはしないでせうか。そこで保姆の知識として現行の軍艦旗の規準を左に掲げて見ました。(海軍省海軍軍事普及部發行「軍艦旗制定五十周年に際して」に依る)

地 色 紅 白
 日章及光線 縦ノト二分一
 日章中心 旗面ノ中心ヨリ風上ノ方ニ偏スルコト縦ノ六分一
 日章徑 縦ノ二分一
 光線幅 十一度四分一
 光線間隔 十一度四分一



殘花聚園 (五)

(日本幼兒教育史資料)

東京女子高等師範學校教授

石川 謙

こゝに紹介して見ようと思ふ資料もまた、曾て引用した
こゝのある『小兒養育氣質』から採つて來たものである。こ
の書の「卷之五」第一に「壬生の戻りにひつかぶつた猿の
面から初まるいさかひ」を題する咄が載つてゐて、その附
録に「世に珍らしい布袋親父ぼいぢおぢが能う名の通りし端午のこご
ぶき」をいふ小話が添えられてゐる。附録の、この小話が
こゝで紹介しようとする當の資料である。

子供の生活の、大人のそれと全く異つた性質のものであ
ることに目を着けて、子供だけに見られる特質の漸次的な
發達を、兎にも角にも描いてゐるところに、この資料の特
色がある。話の主人公は、京都姉が小路通りの或る町に住
んでゐた隠居の布袋屋徳右衛門といふことになつてゐる。
彼は、「二十五になる徳兵衛といふ息子に嫁を取り、家内
睦じう。徳右衛門内儀も姑顔もせず嫁をいたはりし故、嫁
も息子も兩親へ孝行盡して暮し」てゐたといふ幸福な生活

者であつた。原文は次のやうに書き出されてゐる。

「此町内に布袋屋徳右衛門とて、有徳なる作酒屋ありけ
るが。……徳右衛門若い時より生得うまご幼子供を好き。我息
子は行儀能ふ養育そだてあげ上て今隠居同前の身なる故。別して
近頃は他人の愛らしき小兒を集めて悦ばれしが。腹の大
きな大の男の髭親父ひげおぢなれぎ。三つ四つより七つ八つ迄の
子供が毎日遊びに來り。叔父様は内にかへき、一度に十
人ばかり手を引合て尋たづねに來るも、寒氣もいさわす大きな
からだをよここゝこ火燵こたつより出、髭だらけな顔をにた
く笑ふて舌を出し、坊ぼんぎも來たか、サア皆あがれ。叔
父も遊ばせ云ふて、火燵こたつのぐるりに子供を並べ置、毒に
ならぬ菓子なき不斷取置て、銘々に取らせて悦びける
が、ぐわんぜんなき無我な小兒の遊びは、いか様邪氣よこしまのな
い能樂よめみ。此徳右衛門が好すなるもこごはりなり。」
徳右衛門は、小供の無邪氣な様子を喜んで、五人十人

隣近所の子供を集めて、自分の家を子供宿のやうに提供してゐた。「坊主も来たかサア皆あがれ、叔父もあそばさう」といつた分け隔てのない態度で、いつも子供の中に融け込んでゐた徳右衛門であつた。原文は前を承けて直ちに續いて次のやうに展開して行く。

「只折には、利の丸もつともな面白ひ事をいふ物なるは、たんとすの前に徳右衛門の印籠いんろう出てありしが、四つになる坊主の子が走り行て是を取、徳右衛門前へ持来りて悦びし故、めつたに明ぬ物ちや薬がこぼれるさいへば、見るのは大事ないか云ひさま、彼印籠を我耳の傍はらにてしやんくふり、丸薬のごじやく、鳴音を聞て、御火消の持て行かしやるはしごじやくさいふのもの、氣を付て見れば心ある事。火燵ひたつのはたにぬぎ捨てありしほうろく頭巾を、三つになる子が取て徳右衛門の脊せなへのぼり付天窓あたまに著せ、大ごさんじやくくく、ミ手をたゝいて悦び、くの字を得いはぬ舌のまはらぬ愛らしさ、はしりごゝして椽先へ出るか、障子に穴明て覗くもあり。六つになるわんぱく者がからくりの口上いふさ、七つになる子がさんぽがへり、餘念のない小兒の遊びを見て、芝居も花見も思ふて老の慰なぐささする雅人がじん。」

氣を付けて眺めて見るに、三歳の子供には三歳らしい思ひ付きもあり言葉遣ひ舌廻りがあるし、四歳の子供には四

歳らしいいびき、想像力さうざうりきが現はれてゐる。六つになる子のからくりの口上を真似るのも、模倣盛りの六つらしい特徴があり、七つの子が蜻蛉返りの冒險な遊びを好む所も、活動盛りの七つらしい面影が描かれてゐる。三歳から七歳に至るまでの子供の、それぞれの年齢に伴ふ言葉つき、身振り、心の働きを特徴をよくも捉へて具體的に描寫したものである。

知れば知る程、憎めなくなり可愛らしく思へて来るのは子供である。徳右衛門も今は、世の中一杯に張りめぐらされてゐる儀禮の堰を断ち切つて子供に目のない好々爺になり切つて「幼き子供さへいへば乞食の子でも可愛がる生得」さまでなつた。「近所より此の徳右衛門を布袋親父くく異名付て、近き頃は是が通り名の様になつてしまつたのも故なしさしない。

「扱其年も暮れ明る年五月の事なりしが、……目出度節句の前日、酒事に心を和しけるが、常だに子供の多く来る内、けふは朝より止事なくかわるく幼子供たへざりしが、一組五六人男の子供見物に來りしは、いづれも分相應我内人形かざり有子供の中に、一人貧しき職人の子ありけるが、此親近年不仕合故節季くくの工面悪敷で、端午の祝ひに粽も得まかず、人形は勿論七つ道具の粗末なるも得調へず、漸古き蓑蒲太刀一腰此五つにな

る子に持せ置しが、是をさしてうれしがり、町内子供の所へ行て色々人形を見、此布袋親父殿所へ来てもここにこ笑ふて見物し、たれの所にもかれの所にも能人形がある、こゝの人形も能のがたんこならべてある。ア、わしも此様な人形が一つほしひ、けふは飾つてあるによつてなるまひが、跡で比内の大きなを一つおくれゑさいふて歸りしが……」

親の不如意を知りもし諦めもして、他人を羨ましがつたり身を啣かちたりこそしないが、節句に飾る人形の、欲しいに變りのない子供の人情であつた。この人情をすなほに言葉に現はして、節句が過ぎたら一つだけ貰へないものかき切り出した貧しい子の聲は、徳右衛門の耳にはさながら神の御聲のやうに響いた。物乞ふ子供の聲ながら、さもしさもなければいらだたしさの響も宿してゐない。自然の氣持が自然に囁きを呟いてゐるばかりである。だからそこには、哀れさがない。優しいながらも凜然として權威に似たものを奥底深くに潜めてゐた。「否いなは言はせぬいひつたやうな窮屈な權威ではなく、いひつたやうな念に駆り立てる權威であつた。

「布袋親父彼小兒の歸りし跡にてつくぐ思ひしは、扱もふびんな事をいひしかな。彼親も職をいこなむ筋目すぢめの知れたいやしからぬ者。近所不仕合ゆへ、五節句まで

心よふ暮さず人形なごはないはず、幼心にも得心をして古ひ菖蒲太刀一本で足りては居たれご、そこへで人形を見てより、けなりふ思ひア、わしもほしむ、跡で一つくれごかいつまんだ様にいふた一言、さりごは無我でさふもいへぬ所、小兒の直すはこゝの事、ほしむご思ふた心のありたけ只一句で聞せし所は、鬼神をも和らげる三十一もじ、さんご和歌にも感通さす道理、面白くごひさり悦び感じて、息子徳兵衛ごも相談し、家來一人つれて四條邊の人形屋へ行、義經の人形に旗持の添たるご、辨慶の七つ道具さしたる人形さを、金五兩三步で調べ、下男に荷なはせいそくして歸り、宿へ戻らず直に町内の彼小兒が所へ持行……」

徳右衛門は流石によく子供の精神生活を理解して、その尊ぶべき所を尊んだ。「さりごは無我でさうもいへぬ所」に感動して、「小兒のすなほ」を、權威さしてさへ感じた。早速「人形屋へ行、義經の人形に旗持の添たるご、辨慶の七つ道具さしたる人形」ごを買求めて、宿へ歸らずその足で、子供の家へ届けてやつた。金五兩三步（現今の金の直段にして金三百四十五圓なる）の人形を饋るごいふのは餘りに突飛に相違ないが、徳右衛門の感動振りを數字の上に誇張したご、取つて取れぬごはあままい。

「坊よこへいご呼でさらしければ、爺様人形をもら

ふたき、二親をよばりて悦うつくべきも、節句前の工面あしき所へ思ひがけない處へ、有徳者の所持すべき結構なる人形をくれられければ、嬉うれしいやら難儀なげなやら、ほんの小家に人形の過た當惑、此人形代を半分生しょうで被下たらば、けふ節季の能勝手よにならふ物をこ、思ふ夫婦がそぶりを早さいりしは、布袋親父の老功にて見て取、いか様是は子供不便に思ふた斗誠とせに不便ふべと思ふときは、人形よりは内の勝手てなる事をしてやるが近道ちかみちき、氣が付きしゆへ、まよ一向はづすつゝでさふさした拍子うにのり、又懐中より金拾兩取出してさらされしが、是にて誠に人形の忝かたじけない一禮を夫婦がさかさまに成ていへば、彼五つになる坊主は家内をかけ廻りて、義經じや辨慶じやさいふて悦うつくびいさむ所は、昔名人の俳諧師が歌仙の付合に酒を飲で、人に物やる面白さういはれたごさく、此布袋親父の物數奇もおろかな様なれど、有徳なまよに息をたかぶり、妾めかけに我身をいたわり、遊所ぐるひに若い時より不養生する人から見ては、貧者の助にもなる風流な樂にて、何失のない小兒の教しもなる物數奇かな。」

徳右衛門の感動が——さうして其の無闇に直情的な行動が、こゝでも再び常識はづれに成つてしまつてゐた。親たるものゝ事情に委細構はず、桁をはづれた高價の人形を饋つたことは、子供を喜ばせた度合以上に、親を當惑させて

しまつた。き、氣が付いた徳右衛門は、子供の喜びをほんこゝの喜びにしてやる爲めに、その親をも教はねばならぬ羽目うになつた。子供を幸福にするには、如何なる高價な贈り物よりも、先づその親たるものの家庭生活を幸福にしてやらねばならぬと結んだところに、汲めきも盡きぬ滋味があり示唆がある。
(昭和十四年四月二十一日稿)

(五五頁より)

「ちきに又拵へてあげるよ。お前が歸つて來るのがわからなかつたからな。さあ、降りて來て乳をお飲み」

おぢいさんは下から答へた。

ハイディは降りて來て、もこのまよのあのなつかしい高い腰掛にかけて、お椀を取り上げ、ごく／＼のきを喝らして、如何にもおいしさうにお乳を飲んだ。

「ああおいしかつた！、おぢいさん、うちのお乳は世界中で一等おいしいわね」

蛙さんの遠足のお話

武 田 雪 夫

さあさあ、これは蛙さんの遠足のお話なのですよ。

あるところに、蛙さんのお家がありましたよ。——そら、お父さん蛙が来ました。ほら、お母さん蛙が来ました。はい、それから、かほいい子供の蛙さんも、びつさりをりましたよ。

ある日の朝の朝のこです。お父さん蛙が、お目々をさまして、起きるこ、大きな聲で言ひました。

「ガッコ、ガッコ、ガッコ、まあまあ、今日は何てよいお天気だらう。ガッコ、ガッコ。」
するこ、お母さん蛙も、大きな聲で、

「ケロ、ケロ、ケロ、ケロ、おやおや、ほんごによいお天気ですこ。それでは、今日は、家中みんなして、遠足に行きませう。」と言ひました。

するこ、子供の蛙さんたちは、大よろこびで、

「コロ、コロ、コロ、コロ、うれしい、うれしい。」

「コロ、コロ、コロ、コロ、遠足だ、遠足だ。」

「コロ、コロ、コロ、コロ、さあさあ早く行きませう。」

そこで、蛙さんたちは、朝のご飯をすますこ、お仕度をして、みんなで仲よく、遠足に出かけました。

お水の中へ、チャブンミ、ミビこみました。

そのあとから、こんざはお父さん蛙が、ビヨコン、ビヨコンミ、喜んで行つて、お母さん蛙のそばへ、ボチャンミ、ミビこみました。

お水が、パチャーンミ、お母さん蛙や、子供の蛙さんのお顔に、はねかかりました。

お母さん蛙は、びつくりして、ひよいごお水の中へもぐりこんで、スイスイごおよぎました。子供の蛙さんも、お母さんのまねをして、水の中へもぐつて、スイスイごおよぎました。

さうするミ、お父さん蛙も、まけずにスイスイミ、もぐつておよぎました。

お母さん蛙が、一ばん先に、

「クロ、クロ、クロ、まあ、すずしくなりましたこと。さあ、少し休みませう。」と言ひながら、ビヨコリごお池の岸にミビ上りました。

するミ、子供の蛙さんたちも、

「コロ、コロ、コロ、コロ、ああ、すずしくなつた、すずしくなつた。」と言ひながら、ビヨン、ビヨン、ビヨン、ビヨン、お池の岸にミビ上りました。

お父さん蛙も、一ばんあとから、ビヨコンミ、岸へミビ上つて、

「ガッコ、ガッコ、おお、すずしくなつた。それでは、みんなで、ここで休みませう。」

さう言ひながら、その草の中へ入つて行つて、そこへ坐つて、休みました。

するミ、お母さん蛙も、そのそばへ、坐りました。それから子供の蛙さんたちも、すぐに、その草の中へ坐りました。

その時、一びきの子供の蛙さんが、小さな聲で言ひました。

「おや、大へんだ、お辨當を忘れて来たよ。」

もう一びきの子供の蛙さんが言ひました。

「ああ、ぼく、おなかが空いて来たよ。」

お母さん蛙にも、お父さん蛙にも、それがよく聞えましたが、ぎうしたのでせう、知らない顔して、だまつてゐます。

そこへ、ここからか、小さな翅のはえた蟲が、ブンブンブンと、こんで來ました。

すると、お父さん蛙は、バツと大きな口をあいてビョコンとこび上げる、バクッとその蟲を取つて食べてしまひました。

ああ、また、ブンブンと小さな蟲がこんで來ました。こんどは、お母さん蛙が「ビョコリ」とこび上つて、バクッとその蟲を食へました。そして、子供の蛙さんたちに、

「ほら、今日のお辨當は、これですよ。」と言ひました。

その時、また、ここからか、ブンブン、ブンブン、ブンブンと、こんどは、たくさんたくさん蟲が、こんで來ました。

すると、子供の蛙さんたちは、

「やあ、こんで來た、こんで來た。お辨當がこんで來たよ。そら、そら、そら。」と言つて、

みんなでビョンビョン、ビョンビョン、ビョンビョンとこび上つて、たくさんたくさん、蟲をこつて食へました。

お父さんとお母さんの蛙は、子供の蛙さんには、とてもこびつけないやうな、高いところをこんでゐる蟲を、バクッバクッ、こつて食へました。

蟲は、こつさりこんで來ました。

ブンブン、ブンブン、ブンブン……………。

バクッバクッ、バクッバクッ……………。

ああ、みんな、ほんごにたくさん蟲を食へました。おなかが、一ぱいになりました。みんな、そこへ坐つて、休みました。

しばらく、たちました。

お父さん蛙が、気がつくまで、おやおや、お母さん蛙も子供の蛙さんも、みんな、おねんねしてゐます。

お父さん蛙は、大きな聲で言ひました。

「さあさあ、みんな、おきなさい。そろそろお家へ歸りませう。」

みんなびつくりして、お目々をさました。そして、お家の方へ、かへつて行きました。

一ばん先に、お父さん蛙が、ビヨコン、ビヨコン、ビヨコン、ビヨコン。

そのあとから、子供の蛙さんたちが、ビヨコン、ビヨコン、ビヨコン、ビヨコン。

一ばんあとから、お母さん蛙が、ビヨコリ、ビヨコリ、ビヨコリ、ビヨコリ。

するぞ、その時、お空が、黒くなつたかと思ふまで、ザアザア、ザアザア、ザアザアミ、大雨がふつて來ました。

蛙さんたちは、びつくりして、大いそぎで、にげ出したでせうか。

いいえ、いいえ。みんな、平氣で、

「ああ、すずしい、すずしい、よい氣持、よい氣持。」と大よろこびで、雨にザアザアぬれながら、前と同じやうに、ゆつくりゆつくりはねて行きました。

ビヨコン、ビヨコン、ビヨコン、ビヨコン。

ビヨコン、ビヨコン、ビヨコン、ビヨコン。

ビヨコリ、ビヨコリ、ビヨコリ、ビヨコリ。

ザアザア、ザアザア、ザアザア、ザアザア。

ビヨコン、ビヨコン、ザアザア、ビヨコン、ビヨコン、ザアザア。ビヨコリ、ビヨコリ、ザアザア。

蛙さんたちは、さんざんはねて行きました。

ほら、むかうに、蛙さんのお家が見えて來ました。では、この蛙さんのお話は、これでおしまひです。

一男の保育日記をめぐりて(二)

杉 山 米 子
久 米 京 子
附屬幼稚園
幼稚園
母の兒幼

保育日記の一節

六月×日 皆でお相撲をして居たが、S平さん
ミだけはさうして
も取組まなかつた。
何處へ行つても双葉山、男女の川さお相撲ばやりの此頃、幼稚園でも早速厚いマットをお部屋に運んで臨時本場所が始つて居る。「見合つて〜、……のこつた〜」ミFさんの本場仕込みの名行司ぶりに、可愛い二人の双葉山(二人も双葉山だ)云つて名乗りをあげてゆづらないので、たう〜兩方も双葉山になつて取組んで居るのだがお相撲して居る。KさんミCさんは丁度よい取組みで、此の二人ださいつも大相撲が展開される。あちらこちらで、

「Kさん強いね、今負けさうになつたよ。」

「Cちゃんだつて強いよ、先刻Sさん負けしたんだもの、あんな真赤な顔してるから金太郎みたいだ。」

「二人も同じに強いんだよ、だからさつちも負けなないのさ。」

ミ科學的な批評家も現れる。ミにかく、二人も強いさいふ事に意見は一致した。其の中に僅にKさんがCさんを押出して、何さなく皆がホッとした時、此の場所が一番強いミ自他共に許して居るS平さんが、

「僕さしやう。」

ミ土俵ならぬマットの上にもび上つた。

「厭だァー」ミKさん、

「いゝじやアないか、すれば……Kさん強いんだから……」

「ミS平さん」

「厭だァー負けつて判つてるんだもの、つまらないや。」

「じやアね、僕足かけしないから……、ねさしやうよ。」

S平さんは足がらをかけるのがお得意なのだ。

「でもいやだァー。」

「大丈夫、Kちゃん勝つかも知れないわよ。」

Y子さんが慰さめる。だがKさんは一度厭さ云つたら後へは引かない。だん〜空模様が危しくなつて来る許りなので、「それじやア、之皆で片付けてお歸りのお支度しませ

うね、先生がこつちから引きますから皆さんで押して頂戴、Kさん其處押して頂戴」ミマットを又元の場所へ運んだ。斯うして雨は降らなかつたがS平さんミKさんは遂に取組む事なく終つた。力及ばず見極めた所へは決して足を踏み出さないKさんだつた。之と同じやうな事が又暫くたつて十一月の日誌にも出て来た。

十一月×日 暮進して来る汽車を斜前方から見た所を描く。立體的だ。

十一月×日 今日の汽車の繪、遠近法がちやんさ出來て居るので驚く。

十二月×日 ボールドに朝早くから機關車、客車、貨物まで續けて大きな繪を描く。お辨當まで續けた。

斯うした汽車への興味が、かなり長い間續いた頃の事だつた。今迄にも自動車なら自動車、飛行機なら飛行機、一度興味を持ち出すと、自由畫にもハリエにも、當分それ許りを續けて扱ふ事があつた。初め私は自己暗示の現れかミ案じたが、それにしては唯題材が同じだけで構圖はいつも何かしら違へて複雑化して行くので、之は打込んだ興味の繼續だミ安心し且喜んだのであつた。所が或日、それはお友達同志お互に交換する繪を描いて居た時の事だ。

「今日僕F子ちやんに上げる繪描くよ。」ミKさんがF子さんに云つて居る。

「さうそれじやーね、從軍看護婦の繪を描いて頂戴。」
「從軍看護婦つて?」

「戦争に行つてる看護婦さんの事よ、知らないの?、ね、それ描いて頂戴。」

「駄目だよ描けないから……。」

「だつて看護婦さん知つてるでしょ?」

「うん、知つてるよ。」

「だからそれ描いて頂戴。」

「駄目だよ、僕よく知らないんだもの。」

斯うして其の日の繪はやはり停車場に入つて来る汽車だつた。私は此の問答を聞き乍ら、いつかのお相撲ミ考へ合せて、自信のある事であれば決して人前でしないKさんを思つて微笑を禁じ得なかつた。此の日の日誌には

十二月×日 F子さんの繪の注文、君子危きに近よらずと、
たうく斷つた。

だがそれから、今迄餘り人物を描かなかつたKさんの繪に、汽車や自動車ならそれに乗降りする人、通行人、見物人、飛行機には飛行士ミ云つた様に、大いに人物が現れて來た。

母親の感想

繼續的に一人の子供の發育記録をミつて見度いミ思つてゐました私は、あの子の所謂錯畫時代から、入園當時まで

畫を残らず保存して持つてゐます。之をエングの『描畫の發達』の中に出て来る一女兒の描畫發達や、彼の蒐めた數人の例に比べますと、非常に違つてゐます。エングの結論では殆んぎ全部の子供が人物の畫から入つて、ずつとその後人物が主要な畫題となつてゐるこゝのこゝです。あの子は圓がやつと書ける様になつて先づ第一に描いた畫題は時計でして、圓の中に點を幾つか書いて、デンデンと云つて喜んでゐました。その後目鼻らしいものを書き入れて、ママチャン、パパチャン等と云つた時代が、一寸の間ありましたが、自分で望んでゐる程、自分の手の動かないもごかしさに愛想をつかしたらしく、あの子は間もなく鉛筆を持つ事を斷念してしまひました。それから半年も経つた或る日、あの子は久しぶりに珍らしく鉛筆を持つて、自動車の形をスラ／＼と書き下しました。自分自身でもビツクリしたらしく、

「ボンチャンノテテ、ウゴクヨウニナツタ」

と、満足さうに告げた事がありました。それから毎日數枚のオエカキを續けてゆきましたが、いつもいつも自動車ばかりで、何とおだてて見ても人物畫は、せいぜい一年に四五枚位しか書きませんでした。自動車の細部が段々つけ加へられてゆくのです。あの子は矢張り自分で定めた學習のコースにのつて畫を書いてゐるらしいのです。幼稚園に

入つてから、あの子の畫題が偏よつてゐる事を、いろ／＼心配してゐて下つた先生が、ある朝私に、「Kがこんな畫を書きました」と仰言つて、「バスに乗らうとしてゐる父親と自分」の畫を時々お示しになりました。その畫を先生にもほめて頂き、自分でも満足だと思つたのでせうか、あの子はこゝで始めて人物畫に興味を見出した様子なのです。實はこの畫を畫いた數日前に、家で突然、實に達者な筆致で、従軍看護婦の畫を書きました。私もビツクリしましたが、彼自身も驚いたらしく、それから毎日家では人物畫を書いてゐましたが、その數日後に、前に云つた人物畫を、はじめて幼稚園で書く様になつたのです。かうしてあの子は何時にも新しい刺戟を拒絶し乍ら、きわめて徐々に啓發されてゆくのでした。『自信のある事ではなければ決して人前でしない』といふ事は、彼の學習を誠にギョチなくする事で、度々先生から御心配頂き、もつと無邪氣に反應してくればと、私も實にもごかししく思ひました。過去に遡つて精神分析的に見ても、その様な習慣を形づくつた後天的の原因はさうしても見當らないのです。まだほんの小さな赤ちやんで、あほ向けにばかり寝てゐたあの子が、始めて獨力で横向に向きかはつた時は、非常に苦心したものでして、唇を紫色にして、あへぎ乍らやつと向を變へたものでした。始めて子供を育ててみて、物を習ふには、こんな

も苦勞しなければならぬものかき、傍の見る目も痛ましい思ひでした。いろ／＼文獻も見てみましたが、こんな例を書いたのは無い様であります。たゞ一つシン女史の姪が、始めて匍ひ出す時、非常に苦しんだ様を書いたのがありますが、これは彼女が足にまきひつく様な昔風の長い著物を著せられてゐたせいであらうと結論されてあります。

あの子の場合は夏で、裸體に近い服装だったのです。始めて匍ひ出す時や、立つ時にもあの子は丁度同じ様に苦しみました。最初は、頭部が割合に重たいふ身體的な原因に依るものだらうと思つてゐましたが、自轉車を繰るさか晝を書く様な時になつても、何時も力以上の事を爲ようと思はせり苦しむ所を見ますと、原因はむしろ他にある様に思はれます。幼稚園に入る頃になりますと、此の學習の苦しみを人に示す様な事をはばかりになり、自分の力に及ばないを知るに、他人から勵められても、『イヤ』と云つて、一向應じない様になつたものと見えます。よく算術の問題を出してもらひたがつて、せがむのですが、ある時機になるに、フツとそれを斷り、一、二ヶ月も経つてから、突然非常に進歩したところを示して、さもホツとした様な満足氣な様子を致します。あの子は何かしら自分で自分自身の學習課程の法則を見出してやつてゐるらしいのです。赤ん坊の時に唇を紫色にしてまで起きかへらうとしたあの子を知つて

居ります私は、決して無理な勵ましの言葉をかける氣にならないのです。

よく他人様からあの子が天心爛満だとか、無邪氣だとか云はれますが、あの子が内部的に持つてゐる性格的なギョチなさを、何にかして軽くさせてやりたいと思ふ心が切でございませう。

保育日記の一節

一月×日 今日珍しくN夫さんさけんかをして泣いた。

几帳面の爲だ。

「先生KちゃんN夫さんがけんかしてるの」

「先生KちゃんがN夫ちゃん帽子でぶちつこしてるの、

今二人も泣いてるの」

「先生NちゃんがKちゃんのお帽子掛けに帽子かけたんだつて、それでKちゃん怒つて居るの」

やつぎ早やに御注進が来る。一時に八人の訴えをお聞きになつた聖徳太子様の事も思ひ出される。然し何はともあれ、いつもけんかなと思ひも及ばない二人の名なので、現場であるお帽子かけの所にかけて行く。二人で向ひ合つてしやくり上げて居る様子の可愛い事！

「まあ／＼二人で泣いてさうなかつたの？」

「……」

「さ、泣かないでお話して頂戴な。」

「だつて……僕の帽子かけに……CちゃんのをN夫
ちやんがかけたんだもの。」

「ぎれ〜にKさんが説明始めるさNさんも

「だつて僕落ちたから……お帽子のない所へ掛けたんだ
よ。そしたらKちゃんが怒つたんだもの。」

「違ふよ〜、僕がいくら僕のじやないつて云つても君の
だ〜つて云ふから不可ないんじやないか。」

私は場所柄も辨へず笑ひさうになつた。可愛い二人の話
は斯うである。親切なN夫ちやんが落ちて居た帽子を丁度
帽子かけのあいて居たKさんの所へ掛けてあげた。そこへ
Kさんが來かゝつて「それ僕のじやないよ。」と云つた。K
さんはさつきお外で戦争ゴッコの時かぶつてお部屋に置い
て來たのだつた。だから、僕のおぢやない〜といくら斷つ
ても、N夫さんはKさんの帽子が他にある事を知らないか
ら、帽子かけの空いて居るKさんのに違ひないさ云つて其
處へ掛けやうとする。几帳面なKさんにして見れば、たゞ
へ今空いて居ても自分の掛ける場所に他の人の帽子をかけ
るのなご全く厭ふ事なのだ。たう〜親切さ几帳面が意志
の疎通を缺いて爆發して手にものを云はせた譯、二人の特
質が如實に現れて本當に面白い事件だつた。

× × × × ×

あの時のKさん、此の時のKさん、日誌の頁を繰り乍ら

思ひ出は盡きない。あれも書かなければKさんの面影が出
て來ない、あゝ此の事も、さ、筆のまはらないのでもごか
しい。未だ本當のKさんの何分の一の面しか描かれては居
ないが、此のあたりでKさんのお母様に此のペンのバトン
をお渡しする事にする。

母親の感想

あの子がお友達さごんな風につきあつてゐるかさ云ふ事
は、家庭で見聞出來る機會が至つて少いので、はじめて幼
稚園で皆様と御一緒の生活を始めた時、先づ家の者の興味
の中心となつた事でした。幸ひ先生の深い御理解により、
心ゆくまで參觀をさせて戴く事が出來まして、お友達の誰
彼の印象も、大體は捉む事が出來ました。而も母親に見ら
れてゐるさ云ふ感情は、あの子の行動を幾分束縛する様で
すし、周圍のお友達の方々も、何ものかを意識なさる様で、
さうさう、あの子の社交的な方面を、はつきりさ捉む事が
出來ませんでした。慾を云へば、エール大學の附屬保育室
にあつた様な、大きな白エナメル塗の金網が、一方の壁に
なつてゐて、外からは見えるが、内からは見えないさ
いふ様な装置でもあつたら……。そしたら誰も煩はず事なし
に、子供の行動を觀察出來る事だらう等と、誠にせいたく
な夢をゆめみた事もありました。

そこで二年もの永い間、あの子をお育み下さつた先生を

お煩らはせして、性格診断用紙（グレッッチェメルノ學説に基いたもの）に、おの子の特徴を御記入戴きました。それは、三十二項目の性格的特徴が、内向性、外向性の二種に分けてあるものですが、そのうち十六項目は外向性、六項目丈が内向性、他の十項目はどちらにもつかないで、御診断を戴きました。全體として外向性で、社交的な子供といふ事になる様でございます。本校の古川先生のお説によれば、此の外向性性格は、血液型B型と關係があるこの事です。が、おの子の血液型は、矢張りB型でございます。同年齢のお子様を、あまり知りません私共には、おの子の特徴を捉へる事は誠に難かしく、せいぜい妹と比較して見る丈で、あたらう、かうたらう、と推察してゐたのですが、先生の御診断は、大部分私共の推察に一致して居ります。此の診断用紙の項目のうちの一つに、『几帳面』といふ事、『人づきあひがよい』といふ事とが、對照的な一對として出てゐますが、先生はおの子がその両面を持つてゐるといふ診断を遊ばしました。私共も日頃似た様な感じを持つて居りましたので、先生の日記を拜見して居りまして、けんくわをしてゐる有様が目に浮ぶ様で、つひ唇が綻びてしまひました。

X X X X

思へば二年の昔、母親の私が、おの子たつた一人を、扱

ひ兼ねる事があつた程、はげしい所のあつた子供でしたが……。お優しく、御理解深い先生の、お手厚い御愛撫のみに、大勢のお友達に混つて、勢一杯の生活をして、満ち足りた日々を送る様になつてから、勢力の剩餘のためか、幾分荒く激しかつたおの子が、次第におだやかになつてまゐりました。そして右にも左にも容易く動きさうな、傷き易く頼り無かつたあの幼い生物も、先生の適切なお取扱ひによつて、今は人生に處する根本的な態度を確立した様に思はれます。先生は慈み育んで下さるもの、友達には、愉快に協力出来るもの、勉強には面白いものを感じます。好もしい性情の芽生えが、確かにされた様に思ひます。ほんさうにお蔭様で、母親の最も重要な役目の一つは、もう果させて戴いた様な氣安さを感じて居ります。幼稚園の生活によつて、おの子が健全に伸して戴いたばかりで無く、母親一年生としての私までも、母親としての務を教へられ、啓發された事が誠に多く、有難く思つて居ります。なほ又、幼児の心理學に特別の關心を持つて居りました私は、幼稚園の中の、何も彼もが興味深いものでしたので、時々先生をお煩らはせして、色々便宜を與へて戴きました事を、深く感謝して居ります。(完)

ハイデ

(第十四回)

津田芳雄譯

ロッテンマイアさんは階段の上まで見送りに出て来たが、目ざく籠の上の赤い包みを見付ける。地べたへ投げ棄てゝしまつた。

「何です、アデライデ、汚らしい。そんなものを持つてこの家を出てもらつては困りますよ」

ハイディは怖ろしくてミてもそれを拾ひ上げる勇氣はなく、世にも大切なものを奪はれたやうに、訴へるやうなまなざしで、この家の主人を見上げた。

「よし、持つておいで。仔猫でも龜でも、好きなものは何でも持つて行つていゝんだよ。ロッテンマイアさん、われゝは干渉する必要はありませんよ」

ゼーゼマン氏はきつぱり云つた。

ハイディはうれしそうに、素早く包みを拾ひ上

げて、馬車の入口に立つてゐた。ゼーゼマン氏はその手を握りしめて、わたしミクララのことは忘れないでくれ、道々氣をつけて行くやうに、云つた。ハイディは何度もお禮を云ひ、お醫者様にもくれゝもよろしく頼んだ。昨夜お醫者様が、明日は何もかもよくなりますよ、云つた言葉を覚えてゐて、これはきつミお醫者様が計らつて下さつたのだミ、ハイディは利口にも悟つたからである。ゼーゼマン氏はハイディを抱いて馬車に乗せてやり、それから籠ミお辨當が積み込まれ、一等おしまひにセバスタチャンが乗り込んだ。もう一度ゼーゼマン氏が

「きげんよう！」

ミ呼びかけ、馬車は走り出した。

やがてハイディは汽車に乗つた。おばあさんへ

のお土産のパンの這入つた籠をしつかり膝の上にかゝえて、片時も手離さず、時々中をのぞき込んで見たりしながら、何時間もの長い間、ぢつとおきなしく坐つてゐた。今になつてやつと、自分

がほんたうに、おざいさんやペーテルやおばあさんのゐるお山へ歸つて行くのだといふことがわかつて來た。するさいろいろなものから次へ次へ目の前に浮んで來て、みんな今頃はさうなつてゐるかしらさ考へて行くうち、急に心配になつて來て、

「セバスタチャン、お山のおばあさんは、大丈夫だわねえ。死んだりなんかしてやしないわねえ」

と訊いて見るのだつた。

「大丈夫ですとも、きつこまだびん／＼してゐますよ」

セバスタチャンは慰めた。

ハイディは又もの思ひに耽り、いろ／＼の場面を思ひ浮べて見た。一等たのしみの場面は、おばあさんの前にすたりと巻パンを並べて見せるころなので、又しても籠の中をのぞいて見るのだつた。長い間黙り込んでゐた後で、ハイディは又云つて見た。

「ほんたうに、おばあさんが生きてゐるこそさへ

わかつたら、みんなにかいゝのだけれぎ——」

「生きてゐますともさ。死ぬわけがないぢやありませんか」

セバスタチャンは半分眠りこけながら云つた。

そのうちに、ハイディも睡くなつて來た。昨夜の大きわざの上今朝は又早くから起されたので、ぐつすり眠り込んで、セバスタチャンに

「お起きなさい、お起きなさい、バーゼルですよ」

とゆすり起されて、やつと目を覺ました。

その次ぎの日も、又長いこと汽車に乗つた。ハイディは又籠を膝にのせ、この日は一度も口さへ開かなかつた。一步一步おうちに近付いて行くのかと思ふと、うれしくて口もきけないのだつた。突然、思つたよりもずつと早く、

「マイエンフェルト！」

と驛夫が呼んだ。ハイディもセバスタチャンもびつくりして飛び上り、あわてゝハイディの旅行かばんを降ろして、プラットホームに降り立つた。セバスタチャンは、二人を尻目に悠々煙をはいてなほも進んで行く汽車を、うらめしさうに見送つた。今までは乗り物で樂な旅であつたが、これか

ら先きは、こんな田舎の危げな山道を、てく／＼歩いて登らねばならないかと思ふに、うんざりしてしまつたのである。それで、デルフリへ行く一等らかな道を誰かに訊ねやうと、あたりを見廻した。するに、停車場のすぐ外で、汚い小さな荷馬車に、今汽車から降ろした重い袋を積み込んでゐる頑丈な男がゐるので、セバスタチャンは、デルフリに行くにはこの道が一番危くないか、途中で崖から轉がり落ちたりするやうな怖ろしい所はないか、旅行かばんはさうして運べばよいか、なまこくさ／＼と訊ねた。その男は、旅行かばんをぢつと見て、分量で重さを計つて見たりなきしてゐたが、やがて、さうせ自分はこれからデルフリまで行くのだから、子供と靴をこの車に乗せて行つてあげやう、それから先きは、又誰かを見付けて送つて行つてもらへばいゝだらうと云つた。

「わたし、デルフリからなら、よく道を知つてるから、ひきりで行けてよ」

この時まで一生懸命大人たちの話を聞いてゐたハイデイが口をはさんだ。セバスタチャンは山道を登らずにすむので、大助かりとばかり悦んだ。ハイデイをわきに呼び、幾重にもしつかりと包んだ

紙包みと、おぢいさんへの手紙を渡しながら云つた。

「いゝですが、この包みは旦那様がお嬢さんに下さつた大事なものですから、失くさないやうに、籠の底のパンの下へしつかりとしまつておくのですね。もし失くしたら、旦那様は大層お怒りになりますよ。もう前みたいに可愛がつて下さらなくなりますよ。わかりましたね」

「大丈夫よ、きつと失くさないから」

ハイデイは受け合つて、すぐに大切に籠の底へしまつた。靴はその間にもう積み込まれてゐた。

セバスタチャンはハイデイと籠を馬車に乗せ、お別れの握手をした。それから、馱者が傍に立つてゐたので、用心して目線で、籠にくれ／＼も氣を付けるやうに合圖した。やがて馱者も乗り込み、車は山の方へ動き出した。セバスタチャンは自分で送り届けなかつたことに氣が咎めながらも、一足も疲れさせずにすんだことを悦びながら、停車場で歸りの汽車を待つた。

この荷馬車の馱者といふのは、デルフリの水車小屋の粉挽きで、麥粉の袋を持つて歸るところだつた。ハイデイには會つたことはいけれど、村

どうの人の話で、噂は聞いてゐたし、ハイディの両親は知り合ひだつたので、一目見た時から、これがあの噂の子供だなと思つた。さうして歸つて来たのかと思議に思ひ、道々話をはじめた。「お前さんは、アルムをぢさんのところにある子供だらう?」

「ええ」

「向ふではよくしてくれなかつたのかい?、それでこんなに早く歸つて来たのかい?」

「さうぢやなくつてよ。フランクフルトでは、とても大事にして下さつたわ」

「そんなら、何故歸つて来たんだ、?」

「ゼーゼマン様が、お暇を下さつたからよ。それでないさ。歸つちやいけないのよ」

「おいてくれるつてのに、なせるないんだい? 家にあるより、よつぽぎ贅澤が出来るだらうに」

「だつて、おぢいさんとお山にあるのが、わたし、何處よりも一等すきなんだから」

「まあ、歸つて見れば、考へも變るだらうよ。粉挽きはつぶやいた。それから、

「おかしな子供だなあ。何もかも承知で、あの山へ歸つて来るんだからなあ」

さびりごみを云つた。

やがて粉挽きは口笛を吹きはじめ、話しかけて來なくなつたので、ハイディは又あたりの景色に眺め入つた。するまなつかしさで身うちが震へて來た。道ばたの木は一本一本みんなお馴染の木だし、頭の上には高いけはしい崖が、古いお友達のように、ハイディを見おろしてゐる。ハイディはその一つ一つにうなづいて挨拶をかへした。刻一刻さうれしさになつかしさが募つて來て、果ては馬車から飛び降りて、山のとつべんまで力の限り駆け登りたいやうな衝動にかられた。けれども逸る心を一生懸命抑へて、おさなしく身動きもしないで、ぢつとしてゐた。

デルフリに着いたのは、五時だつた。粉挽きが子供を大きな鞆を積んでゐるので、物見高い女子供がぞろぞろと馬車のまはりになかつて來た。ハイディは粉挽きに抱き降ろしてもらふさ。

「有難う。鞆はおぢいさんに取りに寄越してもらひますから」

さ急いでお禮を云つて走つて行かうとした。

みんなは早速つかまへて、口々にいろく訊ねやうとしたが、ハイディがあんまり困つたやうな

顔をするので、強ひて聞き出すことも出来なかつた。

「すつかり怖氣^{おそ}ついてゐるぢやないか、無理もないことだがねえ」

なごみ、互ひにうなづき合ひながら、又もやアルムをぢさんの噂話をはじめた。去年は人に會つても口一つ利かず、會ふほきの者を殺しも兼ねまじき顔をして睨み付けたこと、可哀さうに、あの子だつて、ほかに行くところさへあれば、なにも好んで虎穴に戻つて来るやうなこともしないだらうに、なごみ、云ひ合つてゐるご、粉挽きがそれを避つて口をはさんだ。マイエンフェルトまで親切な旦那様があの子について來てゐて、氣前よく馬車賃と祝儀を自分にくれたこと、向ふではあの子は勿體ないくらゐ大事にしてもらつてゐただけれき、あの子がさうしてもおぢいさんのところに歸りたくて、振り切つて歸つて來たのだごいふことを皆に話した。これは全く思ひがけない話なので、またたく間に村ぢうに傳はり、その晩ハイディのこの驚くべき噂をしない家は、村ぢう一軒もなかつた。

ハイディはデルフリからのけはしい登り道を、

さんく大急ぎで登つて行つた。けれど、籠は重いし、頂上に近づくにつれて路はますますけはしくなつて來るので、時々立ち止まつて息をつかねばならなかつた。始終一つの考へがハイディの頭にこびり付いてゐた。——おばあさんはあのいつもの隅つこで、糸車をまはしてゐるかしら、ほんたうにまだ、生きてゐるかしら？

たうとう山のくぼみにあるおばあさんの小屋が見え出した。ハイディは胸がぎきくして、一散に駆け出した。胸はますます高鳴る。——たうとう家の前に來た。ハイディは手が震へて戸が開けられなかつた。やつミ家の中へ這入つたけれど、息がはづんで聲が出なかつた。

するこ隅つこで聲がした。

「ああ神様、ハイディはいつも、丁度あんな風に駆け込んで來てくれたものでございます。さうぞもう一度だけ、あの子に會はせて下さいませ。——おや、そこにゐなさるのは、ごなただね？」

「わたしよ、わたしよ、おばあさん！」

ハイディは飛んで行つておばあさんにしがみ付き、感きはまつて一言も云へなかつた。おばあさんも、あまりの思ひがけない喜びに、はじめは聲

も出なかつたが、やがて手さぐりにハイディの頭を撫で、捲毛にさはつて見ながら、

「おお、おお、これはあの子の髪の毛だ、あの子の聲だ。神様、ほんたうに有難うございました。」

——だけさお前さんはほんたうにハイディちゃんなんだらうね。夢ぢやないんだらうね。ほんたうに歸つて来ておくれたつたのだね?」

ミ、嬉し涙にかきくれた。

「ええ、ほんたうよ、おばあさん。ほんたうに歸つて来たのだから、もう泣かないでね。もうきこへも行きやしないわ。わたし、これから毎日おばあさんここへ来てよ。ああ、それからね、おばあさんはしばらくは堅いパンを食べなくてもいいよ。ほら、これ見て頂戴!」

ハイディは籠の中から巻パンを出して十二本をすつかりおばあさんの膝の上に積み上げた。

「まあ、まあ、なんてやさしい子なんだらうね」

おばあさんはうづ高い巻パンにさわりながら叫んだ。

「でも、それよりも何よりも、お前さんが歸つて来てくれたのが、わたしには一番有難いのだよ。」

さあ、何か云つておくれ。お前さんの聲を聞かせ

ておくれ」

おばあさんは又してもハイディの髪の毛や、あたゝかい頬つべたに觸つて見るのだつた。

そこでハイディは、自分のゐない間にあばあさんが死んでしまつて、白パンがあげられなくなつたらさうしやう、そんなことになれば、もう二度ミ會へないのだと思ふミ、心配で心配でたまらなかつた話をした。

ペーテルのお母さんのブリギッタが歸つて来て、しばらくぼかみして突つ立つてゐた。

「まあ、ハイディちゃんぢやないか!、だけぢ、一體そんなことつて、あるのかしら」

ハイディは立ち上つた。するミブリギッタは口を極めてハイディの着物や様子をほめちぎつた。前にまはり、後にまはつて叫びつゝけた。

「おばあさん、ほんみに一目見せてあげられたらねえ!、すつかりきれいになつて、きれいな着物を着て、まるで見違へるやうだよ。——この羽飾りのついた帽子も、お前さんのだらう、ちよつと、被つて見せておくれよ」

「いや、わたしかぶらないわ」

ハイディはきつぱりミ答へた。

「をばさん、よかつたら上げるわ。わたし要らないの、わたし、自分のがちゃんこつてあるのよ」
さう云ひながら、ハイディは赤い包みを解いて、自分の古い麥藁帽子を取り出した。長い道中で一層くしやく／＼になつてゐたが、ハイディは一向平氣だつた。ハイディはおぢいさんがデーテ叔母さんに、そんなへら／＼した羽飾りのついた帽子なんぞをかぶつて、二度目の前に現はれるなご怒鳴り付けたごきを、まだ覚えてゐたのである。おぢいさんの家へ歸るごきは、一刻もハイディの頭を去らなかつたので、その時のごきを思つて、ハイディはあんなにも苦心慘愴して、この古い帽子を護りごほして來たのである。ブリギッタは、人にやつてしまふなんて、そんな馬鹿なごきを考へてはいけない。自分はそんな立派な帽子を貰はうなごきは思はないが、もしハイディが要らないのなら、デルフリ村の校長先生のお嬢さんに賣れば、高く賣れるだらうご云つた。

だがハイディはあくまでをばさんへ上げやうご思ひ、こつそりおばあさんの椅子の後にかくしておいた。それから美しい着物をみんなぬいで、腕をむき出しのまゝ、赤い肩掛をかけた。さうして

おばあさんの手をしつかり握つて云つた。

「わたし、もうおぢいさんのところへ歸らなきやならないわ。でも、あした又來てよ。さようなら、おばあさん」

「それちや、又來ておくれよ。あしたきつこ來ておくれよ」

おばあさんは名残惜しさうにハイディの手を握りしめて頼んだ。

「さうしてハイディちゃん、あのきれいな着物をぬいだの？」

ブリギッタがたづねた。

「だつて、もこの服装で歸らないご、おぢいさんが、わたしだつてごきがわからないでせう？、をばさんだつて、はじめわからなかつたんだもの」
ブリギッタは戸口まで送つて來て、意味深長な聲で云つた。

「あの着物を着て歸つたつてかまはないんだごごねえ。おぢいさんは大丈夫見違へたりしやしないよ。だけご氣をお付けよ。なんだかペーテルの話ちや、この頃おぢいさんはごても機嫌がわるくつて、一言も口をきかないさうだからね」

ハイディは別れを告げ、籠をかゝえて又ぎん／＼

山路を登つて行つた。まはりの険しい緑の斜面には、夕陽が眞赤に照り映えて、やがてきら／＼光つた大雪原がはるか上の方に見え出した。登れば登るだけ、後に高い峯があらはれて来るのが面白くて、ハイディは何度も足を止めてふり返つて見た。突然、暖い光りがハイディの足もこの草の上に落ちた。ハイディがびつくりして後を向く。高い二つの峯が、まるで二つの大きな焔のやうに空中に突き出し、雪原が一面に眞赤に染まつて、空には茜色の雲がたゞよつてゐた。——こんなすばらしい景色は、ハイディはもう長いこと忘れてゐた。いくつも見たぎの夢にも、こんな美しい景色は現はれなかつた。——山のてつべんの草は金いろに變り、岩はすつかり火に燃えて、谷一面は金いろの霧につままれた。ハイディはこのすばらしい景色を眺めてゐるうちに、うれしさで感謝の涙がひさりに流れ出た。知らぬ間に手を合はせて天を見上げながら、神様がなにかも元きほりに、それどころか、思つてゐたよりもすつき／＼美しくしておいて下さつたこと、そしてその美しいお山へ、又歸らせて下さつたことを、心から神様にお禮申し上げた。あんまりうれしくつて有難

くつて、さう云つてお祈りしてよいかわからないくらゐだつた。夕やけの光りがすつかり薄れてしまふまで、ハイディはさうしてもそこを立ち去ることが出来なかつた。

それから今度は大急ぎで駆け出したので、間もなく小屋の屋根の上にそびえてゐる樅の木の先きがちよつぴり見え出し、次ぎに屋根、それから小屋全體、そしてたうさう、せんの通りに腰かけて、煙草をふかしてゐるおぢいさんの姿が見え、樅の木が風に枝を鳴らしてゐるのまで、はつきり見えて來た。ハイディは夢中で駆け出し、おぢいさんが氣付くより早く、いきなり駆けよつて行つて、籠を投げ出し、おぢいさんの首にしがみ付きながら、たゞもううれしくつて、

「おぢいさん！ おぢいさん！ おぢいさん！」

さいふばかりであつた。

おぢいさんも一言も口が利けなかつた。何年ぶりかで、おぢいさんの眼には涙が光つた。しばらくしてハイディの巻き付けてゐる手をほきいて膝の上に抱き上げ、ちつ／＼顔を見つめてから、

「ハイディ、それで、さうして歸つて來たのぢや。あんまり都會のお嬢さんらしくもなつて居ら

んやうぢやが。歸されたのかね」

「さうぢやないわ、おぢいさん」

ハイディは一生懸命に云つた。

「そんなご思つちや大間違ひよ。みんな、クララもおばあさまもゼーゼマン様も、それはそれはよくして下さつたのよ。だけきわたし、さうしてもおぢいさんのまごころに歸りたくつて、がまん出来なかつたの。死んでしまふかと思つたわ。息がつまりさうな氣がしたのですもの。でもわたし、一度だつて、歸りたいなんて云はなかつたわ。そんなご云ふのは、恩知らずなんですものね。したら急に昨日の朝まで早く、ゼーゼマン様が、わたしに歸つてもいゝつて仰しやつたの。——でも、それはみんなきつミ、お医者様がよくして下さつただき思ふわ。——ああ、お手紙にみんな書いてあるかも知れないわ」

ハイディはおぢいさんの膝から飛び降りて、お金の包みとお手紙を取つて来て、おぢいさんに渡した。

「これはお前のぢや」

おぢいさんはさう云つて、お金の包みをそばの腰掛けの上に置いた。そして手紙を開いて、讀み

終るま、何も云はずにポケットにしまつた。

「さうぢや、ハイディ、またわしと一緒には山羊の乳が飲んで暮らせるかね」

おぢいさんはハイディの手を引いて小屋の中へ連れて這入りながら云つた。

「ああ、あの金をこつておいで。あれだけあれば、こゝろ三年間ぐらゐは、寢臺でも蒲團でも、着物でも、好きなものが買へるよ」

「そんなもの、わたし要らないわ。わたしにはせんの寢臺があるし、着物だつて、クララがきつさり入れておいて下さつたから、ちつとも要らないのよ」

「まにかく取つて来て戸棚にしまつてお置き。又いつかきつミ要る時があるから」

ハイディは素直に云はれた通りにして、嬉しうにおぢいさんの後から家の中へ跳んで這入つた。なにもかもが元の通りなのがうれしくて、あつちの隅からこつちの隅へき断けまはつた。それから梯子を上つて見て、困つたやうな、びつくりした聲で叫んだ。

「あら、おぢいさん、わたしの寢臺がなくなつちやつたわ」

(三五頁へ)

倉橋惣三著
育ての心

定價 送料

東京、神田區駿河臺三丁目六

一、五〇〇、一四
刀江書院

倉橋惣三著

幼稚園保育法眞諦

東京、神田區神保町一丁目六七

二、五〇〇、一六
東洋圖書株式會社

倉橋惣三共著
新庄よしこ著

日本幼稚園史

三、八〇〇、二〇
同上

倉橋惣三著

幼稚園雜草

東京、日本橋區、大傳馬町

二、五〇〇、一四
内田老鶴圃

日本幼稚園協會編

幼兒に聽かせるお話

三、八〇〇、一四
同上

日本幼稚園協會編

幼兒の樂しむお話

二、八〇〇、一四
同上

日本幼稚園協會編
幼兒發達検査

東京、神田、神保町

一、〇〇〇、八
フレイベル館

淡路圓次郎著

幼兒性行評定尺度

一、〇〇〇、二
同上

倉橋惣三監修
保育叢書

菊池ふじの著
徳久孝子著

幼兒のための
人形芝居脚本

一、〇〇〇、二
同上

及川ふみ著

幼稚園の手技製作

一、〇〇〇、二
同上

膳眞規子著

自然物おもちゃ

一、〇〇〇、二
同上

和田實著

實驗保育學

一、〇〇〇、二
同上

日本幼稚園協會編輯 幼兒の教育

會長 東京女子高等師範學校長 下村 壽 一
 主幹 東京女子高等師範學校教授 倉 橋 惣 三
 附屬幼稚園主事

日本幼稚園協會規則

- 第一條 本會ハ幼児教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス
- 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼児教育ニ篤志ナルモノトス
- 第四條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金參拾五錢ヲ齎出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ケ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ
- 第六條 幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラル、モノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルヘシ
- 第七條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得
- 第八條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ
 - 一、幼兒教育ニ關スル研究及ヒ調査
 - 一、幼兒教育ニ關スル講演會及ヒ講習

會ノ開催

- 一、雜誌發行(毎月一回)
 - 一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行
 - 一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介
 - 一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認めタル事件
- 第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 會長 一名 會務ヲ總理ス
 - 主幹 一名 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス
 - 幹事 若干名 會長ヲ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
 - 評議員 若干名 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス
 - 第十條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
 - 第十一條 主幹 幹事 評議員ハ二ヶ年ヲ期シテ會長ヨリ推舉スルモノトス
 - 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルヘシ
 - 第十三條 本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

定價

拾貳冊	拾貳冊	拾貳冊	拾貳冊	拾貳冊	拾貳冊	拾貳冊	拾貳冊	拾貳冊	拾貳冊
送金	送金	送金	送金	送金	送金	送金	送金	送金	送金
貳拾	貳拾	貳拾	貳拾	貳拾	貳拾	貳拾	貳拾	貳拾	貳拾
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓
拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓
拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓
拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾	拾
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓

(外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい)
 昭和十四年五月十三日印刷納本
 昭和十四年五月十五日發行

不許複製 禁止轉載

編輯者 倉 橋 惣 三
 發行所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 柴 山 則 常
 印刷所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地 杏 林 舍
 東京市小石川區大塚町三十五
 東京女子高等師範學校附屬幼稚園内

發行所 日本幼稚園協會

振替口座東京一七二六六番

注 文 規 定

- 一、本誌御注文の方は凡て前金(郵税共)で願ひます(對券代用の場合は繰て割増)
- 一、御送金の場合には振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます
- 一、送金の節には第何巻第何月號より第何月號迄と明記せられたし
- 一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます
- 一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帯封に前金切の印章を押捺いたしますから本誌は早速御送金を願ひます
- 一、其節の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます

今月からの手技用材料

◇七夕まつり用品——五色の短冊五枚、提灯用紙二枚、銀の星五枚をもつて一組。

五〇組 金一圓五十錢

◇盆提灯用織紙——堅緻な手漉の純粹和紙で、見るからに清々しい水色の絞模様と鮮紅の中紙。

五〇組 金一圓

◇團扇用紙——徑四寸の地紙ミ柄。お子達は柄を取付け圖案を致します。

一〇組 金三十錢

◇夏休み前のおみやげ品——

木舟 一個 金十五錢

紙舟 一個 金二十五錢

金魚ミ風鈴 一人分 金二十五錢

◇模造紙の摺紙値段改正

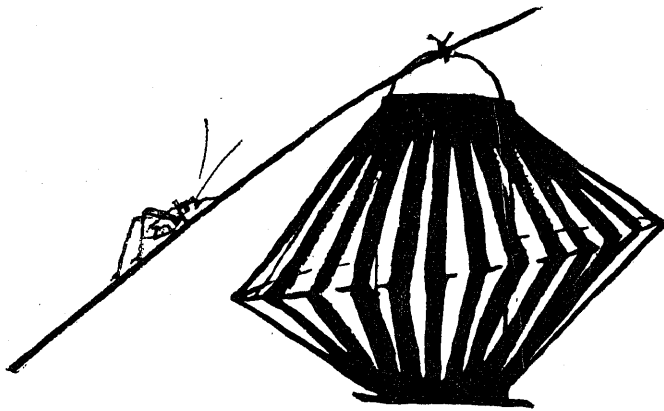
十五糎大形 一〇〇〇枚 金一圓

十二糎中形 一〇〇〇枚 金七十錢

以上は單色ミ取揃へて御座います。

九糎小形 一〇〇〇枚 金四十錢

×四月一日より一品單價參圓以上に壹割の物品税が賦課されます。お含みをお願ひ致します。



食館レベール社 株式會社

本社 東京神田區保二町(33)電話 三三六六二番
支店 大阪東區後五町(24)電話 一八九三番

昭和四年五月十五日第三種郵便物認可
（毎）月一 同 十五 日 發 行

昭和十四年五月十三日印刷
昭和十四年五月十五日發行

定價參拾五錢